立花響と剣の世界

5期が来なかった世界の住人

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ノイズ襲撃でブッ壊れた響ちゃんの心を究極無敵銀河最強ＥＭＩＹＡ（３８歳独身）で修理します。

無限の剣製＋αを受け継いだ響ちゃんの心温まるラブラブ重依存ストーリーです。

目次

無限の剣製
EPISODE1 特異点の少女 ―― 1
EPISODE2 流星の行方 ―― 10
EPISODE3 血潮は尽きず ―― 21
EPISODE4 超先史文明期の巫女 ―― 29
EPISODE5 はじめてのチュウ ―― 37
EPISODE6 無間の鐘の音 ―― 49
EPISODE7 澄んだ不協和音 ―― 59
EPISODE8 恥知らずの武装本能 ―― 73
EPISODE9 蒼き流星サキモライザー ―― 86
EPISODE10 ベッドの上では乱れりゃいい ―― 99
EPISODE11 ふたりぶんの憎悪 ―― 113

無限の剣製
ＥＰＩＳＯＤＥ１　特異点の少女

―１―

認定特異災害。謎に包まれた怪獣〝ノイズ〟。
最も有名な怪談・都市伝説として古くから知られ、１１年前の国連総会にて遂に認定されたそれは正に『異形の怪物』だろう。
形は人型や蛙型など、大きさは大型犬程度のものからビルのようなものまであり、無数の種類が存在しているが、その風貌は総じて『子供の手がけたぬいぐるみ』、あるいは『デフォルメされた宇宙人』とでもいうべき歪で、あまりにも不自然なものだった。
ノイズは破壊活動など行わない。
動物は殺さないし、人の居ない場所では何も壊さない。ただ人間だけを殺す殺戮者達。
空間から滲み出るかのように突如出現し、時間経過か人間との接触により、触れた人間諸共に炭素へと姿を変える。
ノイズは異なる世界に跨がるように存在しているとされ、ノイズ自身が攻撃体制に移行した時以外は通常兵器による攻撃はすり抜けてしまい、大幅に軽減ないしは無効化されてしまう。
それは有効な撃退法が存在しない、人類にとって唯一の天敵だった。

―２―

地獄を見た。
ボーカルユニット『ツヴァイウィング』による史上最大規模のライブは、会場の一角で突如起こった爆発から地獄へと変わり果てた。
湧き出るように溢れてきた超常の獣、大群のノイズによる阿鼻叫喚。

炭にされた人間だったもの。瓦礫に押しつぶされて破裂した人間だったもの。
血に沈んだ脳、内臓、肉の欠片。
そんなものを見て――――
――――立花響（自分という少女）は壊れてしまったのだろう。

「駆け出せ」と誰かが叫んだ。
解っている、今すぐここから逃げなければならないことなんて理解している。
――――理解していた。
「イヤだ……、嫌だよ……」
体の動かし方を覚えていない。
最初は震えていた体も今は静かに脱力している。
感覚を失った足は、石柱のように動かない。
握りしめるべき両手は、指の1本すら動かない。
「助け……て、……未来（みく）――――！」
無意識にその親友の名前を口にしたのは、確かに信頼の大きさもあっただろう。
でも、それは決定的な理由では無かった。
ただ、他の名前を覚えていないだけ、最後まで手放さなかった記憶が親友だった。
何も分からず、何も理解できない。
がくりと世界が揺れ、何が起こったのかも理解せずに意識は闇へと沈んでいった。

―3―

「生き……てる……？」
浮上した意識に思わず発したその呟きを、目の前に広がる光景が即座に否定した。

死後の世界があるとは思わなかった。
赤土に無数の剣（つるぎ）が突き立てられた黄昏の荒野、茜色に照らされた空に浮かぶ雲の隙間からは、鈍色（にびいろ）の巨大な歯車が顔を覗かせている。
振り向けば後ろには真っ黒で何もない空間が広がっている。
それがなんとなく、前に進めと言っているように感じられた。
気持ちがひどく乾いている。
歩きながら、何も覚えていないことを思い出した。
「確か、未来に誘われたライブで……未来が電話で『来れなくなった』っていうからひとりで観に行って……」
――それから、どうしたのだったか。
辛うじて思い出せるのは親友だった未来との思い出だけ、小日向未来の関わっていないエピソード記憶がひとつもない。
自分が死んだというのに、記憶を失ったというのに。
深い悲しみも激しい悔しさも湧いてこないのはほんの少しだけ気味が悪いが、そんな事は今はどうでもいい。
「ライブの帰りに事故にでもあったのかな？　私が死んだら……未来、気に病むだろうなぁ……」
自分の誘ったライブで親友が死んだというのは多感な時期の、13歳の少女にとってはさぞショックだろう。
その後の人生にも大きな影を落としかねない。
ああ、心配だ。
そんなことを考えながら、なんとなく。本当になんとなく、剣を1本引きぬい

『どい――――ライダー――――』
『――――を桜の――――ません』

「……お――――？」
――――瞬間、誰かの記憶がフラッシュバックするように現れた。
少なくとも私のものじゃない。
その記憶の中で、〝自分〟は少年だった。

握りしめていた剣の柄は、幻のように掌をすり抜け、そのまま私の体に吸い込まれていく。
意味の分からない光景なのに、なんの感傷も湧き上がらない。
「――――」
ものは試しと2本目を引き抜くと、今度はまた違う記憶と共に剣は体に入り込む。
少し、気分がいい。
剣を引き抜く度に、少しずつ満たされていくような感覚がある。
自身に意識を向けてみると、なんだかとても空いている。
まるで、自分の〝中身〟が空っぽになったかのよう。
３本目、４本目。
１０本目、２０本目。
５０本目を引き抜いたあたりで、死後の世界という勘違に気付く。
まだ満ちない。
次々に剣を抜き、体に流し込む。
まだ〝空き〟はある。
こんなものでは、全然足りない。
６０本目、７０本目。
１００本目、２００本目。
５００本目を引き抜いたあたりで、この場所が誰か別の人間の心だと理解した。
「――――衛宮……士郎……」
亡くしてしまった『立花響』という自分、その空白に『衛宮士郎』という他人を注いでいる。
――――それなら。
全て引き抜けばこの飢えるような空白を埋められるのだろうか。
瞬きする度に配置を変える無限の剣。
全ては同じ場所に在り、全てがどこにも無い。
その全ての剣に照準を合わせ、ゆっくりと手をかざし――――
どうやってか、

この世界を引き抜いた。
「――――え……？　ッく……ヴァァァ　!?」
突然の激痛に身を捩り、血飛沫の混ざった悲鳴を吐き出した。
それは内へ向けた炸裂。
広がる全ての風景が自分に向けて押し寄せる。
「ひぐゥッ――――――ァァ……ッ」
内側から鉄を擦るような異音が響く。
小さな体を裂きながら、無数の刃が潜り込んで来ていた。

〝世界図、統合〟

胸から入った無数の刃が背中を突き、四肢を裂く。
許容量を遥かに超えて流し込まれる膨大な知識と経験に、頭が内から弾け飛ぶのではと恐怖する。

〝魔術回路五十四本、継承完了〟
〝固有結界『無限の剣製』継承完了〟

剣の丘の照明が落ちる。夢から醒め、目が覚めた。
さっきまであった黄昏の雲天はどこにも無く、目に入るのは白い天井と大掛かりな照明。手術室の手術台（ベッド）に寝ていたのだと理解する。

〝全魔術刻印、復元完了〟

「ウ――――――あああッ――――――！」
薄暗い、無人の手術室。
そこでひとり、夢を見ていた。だけど夢は現実だ。
――――耐えられない。
身体から無数の剣が生え、ギチギチと不快な音が手術室に響く。
千の刃が身体を内から引き裂こうとしている。
痛い。痛い。痛い――――――！

『――――我慢するだけじゃダメだ、抑えこめッ！』

「あ――――え――――？」

どこからともなく声がかかる、男の声だ。

その声の低さは、声の主が若くは無いことを思わせるが、それでいてどこか幼さを感じさせるところもある。

そんな声が、右でも左でもなく、近くでも遠くでもないどこかから聞こえてきた。

「抑え……こ……」

『全ての剣は君を構成するものだ、あるべき場所に押し戻せ！』

内から肌を刻まれる強烈な痛みに。

そして、〝継承〟と共に理解した『衛宮士郎の目的』に思考を揺さぶられながらも、歯を食いしばり、床のタイルを握り潰しながら言われたことを必死で実行に移す。

『その身体は――――』

「から、だは――――」

『――――I am the bone of my sword.』

「――――I am the bone of my sword.」

―4―

「私……生きてる……」

いつの間に手術台から落ちていたのだろう。

どれだけの間、のたうち回っていたのだろう。

「夢じゃ……ない、よね……」

気付いた頃には無人の手術室で立ち尽くしていた。

体中が傷だらけで血まみれだけど、痛みは無い。

暗い手術室だ、無造作に置かれている紙を手に取り機材の明かりでそれを読む。

「……身元不明（ジェーン・ドゥ）、推定１３から……１４……歳。Ｆ．Ｇ．式特機装束の破片と思われる異物を摘出中、体内から溢れだした無数の刃が傷口を――――」

明らかに日本語では無い言語で書かれているそれを、他人の知識で読み上げた。

知識と共に湧いてくる小さな頭痛を、頭を振って追い払う。

「……帰らなきゃ」

こんなものは持ち帰って後で読もう。

今は一刻も早く、帰って未来に無事を伝えたい。

手術室を出ると上等なホテルのような廊下に出た、病院にしてはやけに飾り気がある。

照明が少ないのは夜だからだろうか、窓の外は真っ暗だ。

「あっ、服……すっぽんぽんだ」

緊張が途切れた事で自分の格好に漸く気付いた。

一通り漁ってきた手術室に自分の荷物は置いてなかった。

当然、周りに服が用意できそうな場所も無い。

「……能力（コレ）で作っちゃおうかな」

目を瞑ると脳裏には２７本の〝通り道〟が２セット、静かに使われるのを待っている。

〝魔術回路〟

静かに息づくそれは〝魔術〟という正真正銘の超能力と、それを動かすための炉心だ。

これに生命力……小原（オド）を注ぎ、魔力を流して自分への暗示を一言唱えれば当然のように〝投影魔術〟は成功するだろう。

「……」

一線を越える恐怖がある。

人の身を超えてしまうかのような不安や、あの串刺し刑をもう一度味わう事になるのではという恐怖。

「……まあ、いずれは使うことになる訳だし」

考えても仕方ない、と言い訳を掃いて捨てる。

託されたのだから……少しでも魔術の腕を磨かなくてはならない。

「――――投影（トレース）、開始（オン）」
作る、魔力を編んで最後の自分の記憶から着ていた服を再現する。
魔術回路に熱が宿り、背中から焼かれるような小さな痛みが広がり始める。
「――――っ基本骨子、想定」
鴇（とき）色のブラウス、淡い茶色のカーディガンに、赤いミニスカート。
魔術回路に少しづつ、慎重に魔力を流す。
「――――構成材質、複製。……全工程（トレース）、完了（オフ）、と」
思った通り投影はあっさりと成功した。
完璧とは言い難いが、傍目にはこの服に違和感は無いだろう。
階段を探して小走りで廊下を進む。
窓から外を見た限り5階か6階か。廊下に並ぶドアの横に『５１１』や『５１２』のようなプレートが付いているあたり、ここは5階なのだろう。
病院というよりホテルかマンションだ。
「何だろ……ここ、病院じゃないよね……」
窓から見えたのは謎の台形の生えたサッカーコートとそれを覆うような複数の直角カーブを備えた周回走路（トラック）のある狂気的なグラウンド、グラウンドを挟んで反対側は遊園地か博物館のような凝ったデザインの建物だ。
〝おかしな病院〟の一言では片付けられない歪さに自然と足が速くなってくる。
「っと……あった階段」
階段はすぐに見つかったが、下を覗き込むと明かりが点いていて僅かに話し声も聞こえる。
思わず息を止め引き返し、窓に目をやる。
常識的に考えて、この高さは飛び降りれば無事では済まない。
投影した道具で鍵を開け、窓を開く。
魔術回路に限界数歩手前まで魔力を叩き込み、剣の園から形無きものを引きずり出す。
「投影（トレース）、開始（オン）」

乱れそうな息を落ち着かせ……。
「憑依経験、共感終了――――ッ！」
窓の外に身を投げ出し、五点着地で衝撃を殺す。
継承した知識・経験による着地法に加えて、ごく僅かながらも『衛宮士郎の肉体強度』が再現され、ダメージなし。
僅かな照明で照らされてる場所を避け、影を縫うように出口に向けて走る。
人里離れた場所などという事は無く、立ち並ぶ、低いビルが見える。
漸く現れた理解の及ぶ景色への安心感が、詰まっていた息を吐き出させた。
どこを目指すか、自分の家の場所も覚えていないけれど未来の家にでも転がり込もうか。
未来を慰める為の文句と、顔も声も、居るのかすら覚えていない家族へのフォローに頭をひねりながら帰路に着いた。

ＥＰＩＳＯＤＥ２　流星の行方

―１―

「弦十郎くん、これ……」
「ああ……」
異端技術（ブラックアート）の研究者筆頭、櫻井了子の唖然とした声に、男は思考停止の同意を返す。
ライブ会場から回収した瀕死の少女を寝かせていた手術室は、今や観る影も無い程に損壊していた。
事の起こりは前日。
ライブ会場の惨劇において２人のシンフォギア装者によって構成されていたボーカルユニット〝ツヴァイウィング〟の片割れが命を落とした。
Ｆ．Ｇ．式特機装束、通称『シンフォギア』。
現時点で唯一、人が特異災害〝ノイズ〟に対抗しうる女性専用の戦闘装束だ。
そのシンフォギア装者であった天羽奏という１７歳の少女は、本来シンフォギアへ適合する才能が僅かに足りておらず、櫻井了子の開発した制御薬〝ＬｉＮＫＥＲ〟の過剰投与によって強引に適合係数を掴み取っているのが現状だった。
しかし、ライブ会場で公演と平行して勧められていた実験、Ｐｒｏｊｅｃｔ：Ｎの為の調整の一環でＬｉＮＫＥＲの投与を控えていた彼女は、唐突なノイズ出現による殲滅戦の最中にＬｉＮＫＥＲによる適合係数の底上げ効果が途切れるというアクシデントに見舞われた。
適合係数の低下により、シンフォギアからの反動（バックファイア）が肉体を蝕み始め、アームドギアと呼ばれる各種武装は動作を停止し、ノイズと撃ちあう度に崩れていく。
そんな時に、砕けたアームドギアの欠片がその場に居た逃げ遅れた少女の胸を撃ち抜いてしまったのだ。
適合係数の低下はシンフォギアの強制解除にも繋がる上に、欠片を

胸に受けた少女は明らかに重症でいつ事切れてもおかしくない状況だった。
そこで天羽奏はその命を使いきり、シンフォギアの決戦機能のひとつである〝絶唱〟を放つ事でノイズの大群を一掃した。
本来、絶唱は自爆技では無い。
それでも装者への反動（バックファイア）を顧（かえり）みないものであり、通常はアームドギアを介して放たれるそれを適合係数が底に付いた状態で、アームドギアを通さない広域への爆風として行使した事で天羽奏の肉体は完全に崩壊してしまった。
直後、彼女が命を放り出して守った瀕死の少女は、親友の死に慟哭の止まないもう一人のシンフォギア装者により現場から回収され、シンフォギアの破片が体内にあるという事から大事を取り、シンフォギアを扱う日本政府の非公開組織『特異災害対策機動部二課』が本部と同じ敷地で運営する『私立リディアン音楽院』で緊急手術を行ったのだ。

――――しかし、摘出手術の終盤に異変が起きた。

それは現れた。
内臓の隙間から、筋繊維の隙間から。
ナイフのような無数の鉄の刃が牙を噛み合わせるかのように現れ、メスとそれを持つ執刀医の指ごと傷口を塞いでしまった。
明らかな異常事態に医師達を一時退避させ、万が一に備え急遽憲法違反（地上最強）クラスの肉体を持つ、二課の総司令官＝風鳴弦十郎が数名のスタッフを連れ、シンフォギア装者と駆けつける事にしたのだが――
――
「なんというか……惨憺（さんたん）たる有様ね、監視カメラの映像観た時は驚いたけど……」
「ああ、医療班を下がらせて正解だった」
装者の到着を待つ僅かな間に更に異変は進行した。悲鳴を上げる少女は全身から無数の刃を突き出し始め、大量の血を撒き散らしなが

らのた打ち回り、その刃で辺りを切り刻んだ。
その為、シンフォギア装者の到着を待たずに駆けつけたのだが、既に少女の姿は消えていた。
「『体は剣(つるぎ)で出来ている』か……」
「それは？」
「監視カメラの映像が途切れる直前に少女が口にしていた言葉だ。天井に突き刺さった複数の破片や剣から見るに、この言葉を引き金にして体から生えた剣を飛ばしたのだろう」
剣が突き立てられ火花を散らす無残な姿の監視カメラに弦十郎は大きく溜息をつき、失踪した剣の少女の無事を祈る。
「兎も角、まずは身元を調べなくてはな」
隣で歪んだ笑みを浮かべる女の表情に気付くことも無く――――

―2―

「放課後にまで手間を掛けさせて悪いな立花。お陰で我々生徒会も冬を越せそうだ」
「いーんです。好きでやってる事だし、未来の部活が終わるまでは暇だから」
ライブ会場の惨劇から半年、肌寒い日が増え始めた１０月の下旬。やたら年季の入ったストーブを弄りながら、新しい生徒会長に言葉を返す。
後ろには修理の終わったストーブが積み重ねられている。その内、幾つかは魔術で修復したものだ。
魔術の痕跡は丁寧に隠蔽してあるし、探査阻害も併用した完全犯罪。犯罪じゃないけど。
あの後、私は未来の家に転がり込んだ。
巡査さんに貰った地図のメモを片手に走り始めて、やっと見覚えのある大きな土手道に出た時には既に空が明るくなり始めていた。
ライブ会場で何が起こったか覚えていなかったとはいえ、日の出に見とれて歩みを止めたのは我ながら呆れた呑気さだと思う。

未来の家に着いたのが、完全に日が昇り中学生の登校時間になった頃。
葬式めいた表情で丁度家を出たところだった未来に、お散歩気分のまま「おはよ、未来」なんて声をかけて、それから日が暮れるまで未来は泣き続けてしまった。
それからは未来の事しか覚えていない事を打ち明けて、未来のご両親から居候の許可を頂いた。
家族を安心させる為に週に2日ほどは実家に帰っていたが、それも生存者へのバッシングが激化してきてからは未来への飛び火を警戒して、引っ越しまでの間は控える事にした。
学校でのいじめは意外と味方が多かったのに加えて、結構な大事(おおごと)になったのですぐに止んだのだが、世間様はそうはいかなかった。
1万人を超える死亡者の7割近くの死因がノイズではなく逃走中の将棋倒しによる圧死や避難経路の取り合いによる撲殺だった事に加えて、人気歌手が亡くなった事もあるからしょうがない事だとは思う。けど。
「またか、立花」
「えっ？　……あ、あれ。声に出てたかな」
「いいや、だが立花が表情を曇らせる理由などふたつもあるまい。謂れ無き中傷に家族が巻き込まれるのが辛いというのだろう」
「む」
そんなに表に出ていたかと頬を揉みながら眉を寄せる。
『超能力に目覚める』なんて非日常が起きたとはいえ、半年も経って気が緩んだのかもしれない。
「立花、そんな事……あ、いや。ご家族の件も大事だが外を見てみろ、今日はもう陸上部は解散のようだ。――――ありがとう立花、後は俺が片付けるから立花は小日向(奥さん)を迎えにいってやってくれ」
「へ？　あら、ホントだ」
そういえば未来が『早く終わる』みたいな事を言っていた気もする。
鞄を持ち、「またね」と告げて生徒会室を後にした。

―3―

「おまたせ、響。かえろっ」
「うん」
家が別方向の陸上部の人たちに手を振りながら家路に着く。
片付けを手伝うつもりだったのに、出遅れたせいで結局未来の着替えを待つだけになってしまった。
「未来は今晩、何食べたい？」
「んー？　響の作るものならなんでも美味しいよ」
「むぅ、特に希望無し……と」
『なんでもいい』は一番困る。最近食べていないカレーでも作ろうか。
手を繋いで何気ない会話を交わしながら歩く、会話の内容はいつもとあまり変わらない。
今日あった事やこれからの事、今晩の献立、ポニーテールを止めた未来の新しい髪型。
未来の髪はハーフアップの綺麗な黒髪、自分よりもクセが少なくてちょっと羨ましい。
「……響はさ、変わったよね」
「え――――」
どくん。と、心臓が跳ねる。
「前は食べる専門だったじゃない」
「――――ぁ……あはは、そうだね。お世話になってる訳だから、それにやってみると結構楽しくってハマっちゃった」
笑う未来に慌てて表情を取り繕い、答える。『楽しい』というよりも『嬉しい』の方が近いかもしれないが。
未来にはまだ、魔術の事を話していない。
『自分が死地に送り込んだ親友が、記憶を無くした』というだけでもショッキングな出来事なのに、その親友が『得体の知れない力』に目覚めて帰って来たという事を知らせるのは怖かった。
いつか打ち明けなきゃいけないのは解っている。

隠し事は、時間が経てば経つほど罪は大きく、打ち明けるのは難しくなる。
でも、もう少しだけ。
もう少しだけ内緒にしよう――――

―4―

「……響はさ、変わったよね」
「え――――」
……ああ、なんて分かりやすい人だろう。
変わってなんかいない。私の親友は、昔のままだ。
「前は食べる専門だったじゃない」
「――――ぁ……あはは、そうだね」
半年前に私以外の記憶を失ってから、まるでその穴を埋めるかのように響に備わった〝何か〟。
調理実習で粉吹き芋を作ろうとしてお粥を錬成する程だった料理の腕は高級ホテルのシェフといい勝負なのではというレベルになったし、英語のテストでは常に満点を取るようになった。陸上部の部室の動かない扇風機を直したのも響だ。
それでも、立花響は立花響。
成長の過程が無いだけで、ここにいるのは間違いなく昔のままの響だ。
響が私に隠し事をしている。
それは悔しいし、悲しくなる。
でも、それは私のせい。
響は私が地獄に送り込んだ。
私の送り込んだ地獄で死にかけた。
私の送り込んだ地獄で記憶を無くした。
私の送り込んだ地獄で〝何か〟を手にした。
だから待とう、全てを共有できるようになるまで。
隣で静かに待ち続けよう――――

「――――ッ……!?」
「……響？」
隣の響が急に歩くのを止めて振り返り、目を見開いて何かを見ている。
私の前に腕を出して前に出るその行動は、まるで何かから庇うよう。
見ているのはさっき通り過ぎた貸し倉庫だろうか。
「響？　どうし――――」
「どうしたの」と訪ねようとした言葉は、次の瞬間吹き飛ばされた。
轟音、倉庫で起こった巨大な爆発。
言葉も判断力も、あらゆる思考が吹き飛ばされた。
そして立ち上る煙の中から〝災害〟は現れた。
「ひっ……」
「ノイズ……ッ！」
認定特異災害〝ノイズ〟、人類の天敵。
たった半年前に現れたばかりの地獄の住人が這い上がってきた。
「未来！　『逃げるよ』ッ！」
「っ……」
響に手を取られて走りだす。
恐怖と驚きで動かない筈の自分の足は、響の声を聞いた途端に不思議な強制力を感じ嘘のように動き出した。
「ッ……追ってきた！」
手を引く響がちらと後ろを見て顔を歪める。
「別世界じゃない……六次元？　遮断できる……かな……」
「ひ……響……？」
全力で走っている陸上部の自分の手を引いているのにも関わらず、あちこちに気を配りながら走る響。
その余裕の無い表情には、自身の体力への不安は一切見当たらない。
いつの間にかノイズはそこら中の道に溢れている。

逃げる、広い道へ。
ノイズの居ない道へ。
「はっ……ぁ……っ……はぁっ……」
「頑張って、諦めないでッ！」
息が上がってるのは自分だけだ。
最初の言葉のお陰かトップスピードのまま足は動く。だけどそれも無尽ではない、このままではいつか限界が来る。
なんて理不尽なんだろうか、悔しさに視界が歪んでくる。
５つ目の角を曲がり、また走る。
ああ、限界が迫ってきた。
手を放し、響だけでも逃がそうと決意をするのに時間はいらなかった。
別れの言葉もすぐ
「未来ッ――――!!」
しかし、自分が放すよりも早く凄まじい力で突如、腕を引かれた。宙に放り出され、直後に破裂のような音が周囲に響き渡る。
思わず閉じた目を開くと自分は響に横抱きに抱えられていて、さっきまで居た所には巨大な緑の槍が２本――――空から落ちてきたノイズがアスファルトを割って突き刺さっている。
響は自分を抱えたまま体勢を立てなおして再び駆け出そうとし……唐突に足を止めた。
「囲まれた……」
さっきまで開いていた道は向こうが見えないほどの人型ノイズが詰まっている。
後ろはそれ以上だ。
結構逃げた。稼いだ距離は自分でも信じられない。
でも、これで積みだ。
なのに響の表情は、まだ生きるのを諦めていなくて。
「揺れるよ、舌を噛まないようにね」
「……え？」
響はそれだけ言うと、私を抱えたまま踏み出した。

たった一歩の踏み込みでアスファルトを踏み砕き、道の端にある塀を次の一歩で登り切る。
ほんの一息、瞬き程度の時間で今度は民家の上を駈け出した。
屋根の上、屋根の間を流星のように駆け抜ける。その速さはさっきまでとは段違いだ。
横を向いている自分すら突風で息苦しい。山程湧いてくる質問も声にならない。
「フ……ッ」
僅かな衝撃しか感じさせずに大通りに降りた。
大通りにはノイズは居ない、そう安心したのは一瞬。
唐突に響の表情が焦りに染まり、抱えられた自分とふたり撃ち出されたかの様に加速した。
なんとか前に向けた視線の先には4体の人型ノイズ。
――そして、追い詰められてへたり込む少女。
「綾香……？」
思わずその少女の名前を口にした。遠目にも分かる、一之瀬綾香。
最近陸上部に入った、今日は先に帰った後輩。
響と共通の大切な友達。
「やめ、ろォォォオオッ――――!!」
悲鳴のような咆哮を上げ、横抱きに抱えていた私を右腕だけに回して左腕を突き出す響。
まるでジェット機のような加速。隣の私も抱えられているというより、右手を添えられているだけで殆ど飛んでいる状態だ。
響の考えは分かりやすい。
『自分を身代わりにして、私と綾香を逃がす』。この状況で彼女が考える事など他に無い筈だ。
それなのに、不安は無い。
おかしな期待に心を支配されている。
「投影（トレース）――――」
突き出した響の左腕から、溢れるように迸る青い稲光。
何故だろう。今の響なら、どんな絶望だって覆してくれるのではと

予感してい

「――終了（オン）――――！」

一瞬にして綾香とノイズの間に割って入った響は『慣性なんて知らない』とばかりにたった1歩の踏み込みで静止し、私は綾香の隣に降ろされた。

「はアッ……！」

振り抜かれた響の左手にはいつの間に現れたのか、一振りの黒い剣が握られている。

赤い蜂の巣模様の刻まれた刃渡り60センチ程の反りのある黒い幅広の刀身。

4体のノイズは雑音のような断末魔を上げて炭素と還る。

あらゆる攻撃を受け付けない筈のノイズが当然のように上半身を切り飛ばされて崩れ落ちた。

「しっかりして……、綾香！」

「先……輩？　え、あれ……響さん……!?」

「――やアアッ！」

左手の黒い剣を振り向いた直後、そのまま勢い良く振り向いて右の腕でもう一刀を投擲する響。

放たれた色違いの白い剣はノイズの群れに飛び込むと、小さな爆発を起こして追ってきたノイズを纏めて吹き飛ばした。

「凍結（フリーズ）、解除（アウト）」

呪文を唱え、響は白の剣を再び右手に作り出す。

今の響なら、どんな絶望も覆してくれる。

希望を携えた正義（ヒーロー）の味方。それなのに。

「どうして……」

「……ごめんッ……。未来……ごめん――――」

それなのに、まるで処刑を待つような顔で私を見ている。

「――打ち明けるのが、怖かった……」

「――――あ……」

力が、抜けた。

なんて勘違いだろう。
私にとっての正義（ヒー）の味方（ロー）は、響にとってはただの嘘つきだったのか。
私が響を地獄に送り込んだ事は、響にとっては生還した時点でどうでもいい済んだ事で。
すれ違ったまま、意味の無い言葉だけを交わしながら互いが互いに許される事を待っていた。
響は昔からそうだった。
どんなに辛い事があっても「へいき、へっちゃら」の一言で流してしまう。
それでいて他人の痛みには人一倍敏感だった、優しい人。
他人を恨む事を知らず、自分自身を恨み続ける不器用な子。
何度も投げかけた「変わったね」という疑いの言葉で、知らず響を追い込んでいた。
恐怖、驚き、困惑。余計な気持ち、余計な考えを大急ぎでしまい込み、固まりかけた表情を精一杯の微笑みで上書きして顔を上げる。
「――――響」
家に帰ったら謝ろう。
響に許してもらって、響を許してあげないと。
「ありがとう……未来――――」
陰陽の剣を手に怪異に向き合う、少女の姿は凛々しかった。
「――――私、魔法使いなんだ」

ＥＰＩＳＯＤＥ３　血潮は尽きず

―１―

未来の笑顔で心は軽いが体は別、四肢は重たい鉄のようだ。
綾香ちゃんを守るために今の立花響（じぶん）の限界を超える速さで駆けた上に、〝宝具〟の強引な高速投影という明らかに分不相応の魔術を行使した事で魔術回路に少なくない負担がかかってしまった。
〝宝具〟とは、早い話がアーサー王の聖剣を始めとした『超スゴい伝説の品』だ。
投影したものは宝具の中では比較的投影による負担が軽い一対の夫婦剣だが、それでも宝具。その構造や理論は非常に難解で複雑だ。
赤い蜂の巣模様の刻まれた漆黒の刃を持つ陽剣〝干将〟と白亜の刃を持つ陰剣〝莫耶〟。
衛宮士郎にとって最も相性のいい武器で、彼は未来の自分から受け継いだこれを改良を重ねながら死亡するまでの２０年に渡って使いづつけた。
その経験を受け継いだ私にとっても、恐らく最も相性のいい武器だろう。
そして霊体とも渡り合えるこの武器は、存在の殆どが三次元を超えた場所にあるノイズという兵器に対しても有効だ。
「二人とも、大通りまで『逃げるよ』ッ！」
白と黒の双剣で迫るノイズを切り払いながら左肩の〝魔術刻印〟に魔力を通し、言葉に力を持たせて二人の逃走を後押しする。
既に未来には結構な距離を走らせてしまった、あまり長距離の移動は出来ない。
商店街を抜ければ４車線ある丁字路に出る。ノイズは障害物をすり抜けてくる、迎え撃つなら遮蔽物のないそこがいい。
「はっ――――！」
勢い良く踏み込み、剣を振るう。
一振りごとに数体のノイズを両断し、塵へと返す。

密集しているノイズには投擲した剣を崩壊・爆散によりさせる事で一掃し、脳裏に用意していた設計図を解凍して次の剣を手元に呼ぶ。
「本当に……響さん……？」
「そうだよ、もう少し頑張って……！」
商店街を抜けるまであと少しだ。
未来に手を引かれて走る綾香ちゃんに無理をしていると悟られないように慎重に声を返して、駆けて来るノイズの群れを切り払い、球体に姿を変えて砲弾のように空中を突き進むノイズを叩き落とす。
「え――――？」
「響！　前、上っ！」
上から飛行型のノイズが翼を畳んで二人を目掛けて急降下をしようとしているのに気付いた未来が慌てて声をあげる。
「――――Ｉ（体）ａｍ（は）ｔｈｅ（剣）ｂｏｎｅ（で）ｏｆ（出）ｍｙ（来）（て）ｓｗｏｒｄ（い）（る）．」
言われるまでもなく気付いていたし、過剰なものかもしれないけれどその為の盾も用意している。
――――でも、未来の声を聞く度に鼓動は高まり、鉄の四肢は軽くなっていく。
「〝熾天覆（ローアイアス）う七つの円環〟――――！」
降り注ぐノイズは〝それ〟に傷一つ負わせる事なく衝撃で崩れていった。
展開したのは用意していた花弁の盾、五枚の桜色に輝く花弁から成るその盾は今の自分に使える最硬の守りだ。
干将を消した左手で宙に掲げる盾を動かし、後ろから飛来するノイズを弾き、莫耶の投擲で曲がり角に待ち構えていたノイズを一掃する。
遂に２人と商店街を抜けて大通りに逃げ込んだ。
盾はもういい、再び干将・莫耶の二刀流に戻して押し寄せるノイズを迎え撃
「――――いない……？」
角で待ち構えていた一団を除いて、大通りにはただの１体もノイズ

は居なかった。
「……響、あれって……」
未来が通ってきた道を指差して呟く。
見れば視線の先には風に吹かれて崩れつつあるノイズの形をした炭の像が建っていた。
「ノイズの活動限界？　1時間も経たずに……」
活動限界。
ノイズは出現から一定時間で自壊するというのは有名な話だ。
元々有力な説だったのが、1年前の出現時に一斉に崩れていく場面が映像で記録されているのだ。
「助かっ……た……」
「……うん、お疲れ様。頑張ったね」
へたり込む綾香ちゃんと息を切らせて足を擦（さす）る未来に優しく応える。
まだ気は抜けないけれど、態々不安を煽る事もない。
「――――ああ、そうだ。綾香ちゃん……、ちょっといい？」
あとは、これをして終わりだ。
膝を折り、目線を合わせて暗示の刻印に魔力を通す。
暗示は永続する訳ではないし、あまり人の記憶を弄るような真似はしたくない。
私の魔術を言いふらしてもノイズとの対面によるショックで幻覚を見たと疑われるのがオチだろう。
だけどこの子は別だ。
彼女をこのまま帰す訳にはいかない。
綾香ちゃんには、魔術の事を忘れてもらわないと。

―2―

綾香ちゃんを途中まで送ってから、未来の家に着いた頃には陽はすっかり沈んでいた。
未来はどうやらお姫様抱っこがお気に召したようで、綾香ちゃんと

別れてからは未来(お姫様)を抱えたまま車の通らない道を選んで帰路に付いた――――のだけれども、家の前で待っていたご両親が疲れて寝てしまった未来を見て『未来の身に何が』とパニックになったのは少し焦った。

騒がしさに目を覚ました未来が「響が助けてくれたの」なんて言うもんだから更に大騒ぎ。

「もう、響ちゃんも怖かったでしょうに。こんな日まで作ってくれなくてもいいよー?」

「いーえ! このプロジェクトはもう止まらないんです……! そろそろ出来ますから、席に着いててくださいな」

そして未来母から今日の晩ご飯の担当を掴み取る為の説得にも中々骨が折れた。

ノイズに襲われる前と帰り道で未来が寝てしまってからはずっと献立の事を考えていたせいで、私の脳内では壮大なカレー計画が進行しつつある。

明日の朝・昼・晩にも形を変えてカレーを投入するのだ。

その計画を密かに楽しみにしていた自分に「今日は私が作るわ、響ちゃんは休んでて?」などという未来母の一言は軽い絶望、必死になって説き伏せた。

「さて、できましたよ~」

「はぁい。未来とお父さん呼んでくるわね」

それに、いつもと変わらない日常で未来に安心して欲しかったのもある。

「――――ふむ」

配膳しながら離れた場所にいる使い魔(ドローン)の視界を覗き見る。

厳密には〝使い魔〟というよりも無人偵察機みたいな〝魔術礼装〟なのだけれど。

視界に映るのはお城と表現しても問題ない程の大きな館。

綾香ちゃんの帰った家だ。

窓の奥に光は無く、彼女以外の人の出入りも今のところ見られてい

ない。
帰り道、綾香ちゃんと別れてからテスト飛行中の使い魔（ドローン）の自動飛行を解除して彼女の後を付けさせていた。
今回のノイズ発生ではもはや静観出来ない程の情報を知ってしまった。あの子がノイズ発生に少なからず関与しているのはほぼ間違いないと思う。

私の魔術は固有結界『無限の剣製』とその副産物だ。
固有結界そのものは、今の自分には使えない。
主に扱うのはその副産物。
私の魂に刻まれた心象世界である『無限の剣製』の中には剣を構成するあらゆる要素が満ちており、剣であれば一目見ただけで〝解析〟を完了し、複製品が保管される。
剣でなくとも複製品は作れるけれど、消費する魔力は剣というカテゴリから遠ざかるほど多くなる。
ノイズに襲われた時に剣を呼び出した〝投影〟の魔術も、無限の剣製で作った物を現実世界に引き上げているようなものだ。
ノイズと対面した時、自分の眼はノイズを解析した。
構造は全く読み取れなかったが、『どういうものなのか』という事だけは理解した。
ノイズとは兵器、人工物だった。
生命力を吸い上げる過程で心中するように炭へと変化する兵器。
存在の殆どを三次元を超えた場所におく事で、一方的に人を殺す兵器。
『人間だけを殺す』という性質からそうではないかと思っていたけれど、やっぱりショックだ。
そしてノイズの発生は3年前に長野県で発生した小規模なものから、半年前のライブ会場の惨劇の間にも同じ日本国内で2件あった事が知られている。
しかし、それより前の発生は実に8年前まで遡る。場所も日本とは違う。

その前は１８年前、更に前は２８年前。疑わしいものもあるが、３年前まではノイズとは『１０年周期で世界のどこかに現れるもの』でしか無かった。
３年前から始まった日本におけるノイズの頻繁な出現は即ち、日本のどこかに『ノイズの発生源を掌握した人物』が存在する事を意味する。
綾香ちゃんはノイズに囲まれていた時の演技混じりの怯えや、本当に殺されそうになった時の驚愕と困惑の混じった表情から、『ノイズの発生源を掌握した人物』と通じている可能性が高い。
だとしたら情報において先手を譲る訳にはいかないし、何よりも綾香ちゃんの身に危険が及ばないかが心配だ。
「おまたせ、響」
「うん、それじゃあ食べようか」
思考を切り上げて席に着く、今日のカレーは実に良い出来だから反応が楽しみだ。
「しかし……、響君にはなんと礼を言っていいのか」
「それ、もう１０回は聞きましたよ。賢二さん」
未来父は壊れたスピーカーのように感謝の言葉を垂れ続けている。
これを口にして未だ「うまい」以外の言葉を吐く余裕があるとは手強い人だ。
いつかこのラスボスの舌を陥落させてみせ

―３―

「さあ、聞かせてもらうからね……響！」
「あは、アハハ……。お手柔らかに……」
食事とお風呂と歯磨きを済ませてベッドの上、パジャマに着替え向き合って座る。
取調室で尋問を受ける容疑者みたいなキブン。
さて、どこから話したものか。
「えっと……、未来にはライブ会場の側で目覚めたって話したよね？」

「うん。その時から響は私との記憶しか思い出せなくなったって」
言葉にすると結構な嘘で固めている。
「本当は違うんだ。目が覚めた場所は手術室、それも病院じゃなくって『私立リディアン音楽院』っていう少中高一貫の学園」
「リディアンって、あのリディアン？　天羽奏（ツヴァイウィング）と風鳴翼が通ってた……」
「そう、そのリディアン。リディアンは特異災害対策機動部二課が運営してるみたいなんだ、院長の有間悠穂（ありまちかほ）も存在しなかった」
『特異災害対策機動部』はノイズが出現した際に出動し、避難誘導やノイズの進路変更などを行う政府機関。それが一般的なイメージだろう。
実際その通りなのだけれど、特異災害対策機動部には一般に知られる一課に加えて、完全非公開の二課が存在した。
手術室から持ちだした書類とビンに収められた白い欠片を引き出しから出して未来に渡す。日本語じゃない場所が多いが、いずれ未来に見せるつもりだったのでそういったところには自分が和訳を書き込んである。
「それじゃ、高校受験はリディアン受けるつもりだったんだけどやめた方がいいかな？」
「ん？　んー……、別にリディアンが危険地帯って訳じゃないと思うし平気だと思うけど……」
内輪で使われる報告書のようだけど、丁寧な文からは様々な事が窺い知れる。
書類に書いてある事から推測すると『二課』はF・G・式特機装束というノイズに対抗しうる兵器、通称『シンフォギア』を保有しており、それを扱うことの出来る適合者を探すためにリディアンを運営しているようだ。
「胸にシンフォギアの欠片が埋まってるって大丈夫なの？」
「大丈夫だよ、殆ど取り除かれてるから」
ビンの中に収められた5つの欠片を眺めながら未来が言う。
自分の中には未だに3つと6粒の欠片が心臓付近に残っているが、

これといって直ちに影響のあるものではない。
　それに、今なら自力で取り出せる。……あとでやっておこう。
「あの白黒の剣と大きな花もシンフォギア？」
「ううん。二課の人達は私の能力を胸に入り込んだシンフォギアの影響で発生したものって思ってるみたいだけど本当はシンフォギアとは全然関係ないものなんだ」
　投影（トレース）、開始（オン）と小さく口にして手元に干将を作り出す。
「おお？　結構重いね」
「鉄の塊だからね、刃に触らないように気を付けて。私の能力は……なんて説明すればいいのかな、魔術っていうんだけど……」
　頭の中で説明文をこね回す、改めて考えてみると冗談みたいな話。
「ライブ会場で何があったかは覚えてないんだけど……惨劇を目の当たりにしたせいで心が欠けちゃったらしくって」
「らしい？」
「うん、私に能力を託した人がいたんだ」

ＥＰＩＳＯＤＥ４　超先史文明期の巫女

―１―

私に能力を託したのは衛宮士郎という男。
それは平成の世を生きた超人だった。
といっても彼はこの世界に生きた訳では無い。
異世界の住人。
衛宮士郎の生きた世界は、この世界と大きく違った在り方をしていた。
衛宮士郎の生きた世界にノイズなどは発生しなかったし、立花響の生きる今に『極悪非道の魔術師』など存在しない。
衛宮士郎は端的に言えば『正義の味方』だった。
研究成果の為ならどんな非道も進んで行うような魔道の探求者達に、何代もかけて積み上げた成果の抹消という絶望と共に人間としての基本道徳と一般人ライフを叩き込みながら世界中を回った。
彼が世界を救ったのは１度や２度では無い。
自分を労ることを知らず、自分を労る存在も居なかった彼は、初めて戦いに身を投じた１７歳の冬からたった１日たりとも休むこと無く歩み続け、いつしかこの世の何よりも強い『正義の味方』になっていた。

そして西暦２０２３年。
３８歳だった衛宮士郎はいつものように世界を救い、代償として命を落とした。
しかし衛宮士郎の旅はここで終わらない、彼は死後も人類を守る為に戦い続けた。
彼の魂は死後、世界の外側にある〝英霊の座〟というものに収められ『人類の自滅』が確定すると抑止の守護者（カウンターガーディアン）として現界する。
人類滅亡から数年遡った時代に自由意志を持って現れ、失われる命を最低限に抑えるのだ。

その『人類の自滅』は私の世界にも順番が来たらしい。
だけど、衛宮士郎はこの世界に現れる事が出来なかった。
抑止の守護者（カウンターガーディアン）は、時間軸という〝道〟を左右に逸れるように並行世界にも現れる事が出来る。しかし、衛宮士郎の生きた〝道〟と、立花（わたし）響の生きる〝道〟はあまりに遠すぎたのだ。
その上、この世界には通常（ほか）の守護者は現界できないそうで。
『心の欠損による立花（わたし）響の衰弱死』が人類滅亡を確定させる特異点になっていた事に気付いた彼は、私の心象世界に融合する形でなんとか現界を実現させ、同時に私の命を繋ぎとめた。

―2―

「――――というワケであります！」
「……本当にかすりもしないのね、シンフォギア。別の世界だなんてアニメみたい」
親友の白状に絞りだすように返事を返す。
「アニメみたい」とは言ったものの、こんなおかしな設定のアニメなんてあるのだろうか。
響が言うには融合と言っても精神的に引っ張られるという事は無いらしい。
継承したのはあくまで能力と知識・経験、その知識と経験もあくまで自分のものではない異物という事で〝追想〟よりも〝閲覧〟に近いそうだ。
分かってはいたけど本人の口から聞くと安心する。
「なんか、思ったより話が大きくってびっくり」
「アハハ……、未来が信じてくれて良かったよ」
響の言うことだし、実際にその〝魔術〟というものを見たわけだから信じないという訳にもいかない。
「でも、人類滅亡かぁ……」
危ない事はしてほしく無いけど、滅亡する人類に響と私も含まれて

いるのが複雑だ。
喉の辺りで「危ない事はしないで？」という言葉が行ったり来たりしている気がする。
「大丈夫だよ」
「ぁ……」
いつの間にか近くに居た響に頭を抱き寄せられて、喉まで出かかった言葉が消える。
「それに、半年前に私が生還しただけでも人類滅亡は確定しなくなるんだから。バタフライ・エフェクトみたいに知らない所で勝手に解決してる可能性だってあるんだ」
「それならいいんだけど……」
「無茶はしないよ、約束する」
「……うん」
結局、『結論を急いでもいいコト無い』なんて言い訳で思考を止めて目を閉じた。「私、魔法使いなんだ」と言って怪異に向き合った響の背中が今も瞼に焼き付いている。
その追想で、不安な気持ちは綺麗さっぱり消え去った。
「響なら、大丈夫だよね」
「もちろん」
新しく出来たこの大切な思い出。
響との間の、壁も溝も無くなったこの記念すべき日を、『人生最高の1日だった』と言えないのが残念だ。
クラスの友達や陸上部の皆、無事で居てくれるといいな……。

—3—

眠りに落ちた未来の頭から撫でる手を離し、掛け布団を掛けてベッドをぬけ出す。
「……ごめんね」
『無茶はしない』なんてバレバレの嘘の誓いに、未来は何も言わずに信頼を返してくれた。

「その信頼は、絶対に裏切らないから」
小さく囁いて、部屋の隅へぺたりと腰を下ろす。
余裕ぶってはみせたものの、今日のノイズ襲撃から未来と綾香ちゃん……特に綾香ちゃんを守り切れたのは本当にギリギリだった。
ビルのような巨大なノイズはおらず、成人男性程の小さな個体だけだったが、あの兵器達の砲弾のような体当たりは凄まじい重さがあった。
早い内に未来の為にノイズの炭素転換を防ぐ魔術礼装を作るつもりなのだが、あれほどの破壊力の前では有って無いようなものだ。
半年間の修練に加え、投影した剣の担い手の技量を再現する〝憑依経験〟によって肉体強度が大幅に引き上げられていた自分でさえ、あれの直撃は致命傷になりかねない。
〝侮っていた〟
『他人のもの』というのは知識と経験だけでは無い、この能力（魔術）だって他人のもの。修練を重ねる事で少しづつモノにしていたのに、その半年間の集大成があのざまだ。
「投影（トレース）、開始（オン）――――」
５４本の通り道に魔力を通し、イメージするのは陰陽の夫婦剣。
魔術回路の起動によって背中からは刺すような痛みが染みるように広がっていく。
創造（何の意図があったか）に至る理念を鑑定して、
基本（何を目指したのか）となる骨子を想定して、
構成（何を使ったのか）される材質を複製して、
制作（何を磨いたのか）に及ぶ技術を模倣して、
成長（何を想ったのか）に至る経験に共感して、
蓄積（何を重ねたのか）された年月を再現する。
やがて右手に白、左手に黒の剣が現れた。
未来の家には探査阻害を含めた複数の〝結界〟を貼っている。この中では宝具を投影してもそうそう気付かれる事は無いだろう。
女の子座りのまま、四つん這いになるように剣を握る拳を床につけ、流す魔力を増やして読み込みを加速させていく。

暗闇から掻き出すように、もっと深く、もっと広く、より速く、より繊細に、限界スレスレまで干将・莫耶の経験を引きずり出す。
衛宮士郎が17歳の時に未来の自分から受け継ぎ、その後の20年に亘る生涯の象徴（シンボル）としたこの夫婦剣は、彼が旅した二周ぶんの人生を覚えている。
投影を止めて剣を手放せば消えてしまう力と技を、少しでも自分の身体に刻まなければ明日は無い。次も未来を守り抜けるとは限らない、今度こそひとりになってしまうかもしれない。
そうなってしまえば最後の〝意味〟が消え失せて、自分は壊れてしまうと。そんな確信のような予感がある。
「――――投影（トレース）、終了（オフ）……、ふぅ……」
雑念が入った。
一旦、仕切りなおそう。
手は打ったんだ。
綾香ちゃんの後を付けていた認識阻害を組み込んでいないテスト飛行用の使い魔（ドローン）は、未来とお風呂に入っている時に飛行型のノイズに叩き落とされたのを確認している。
そうなるように、目立つ位置から館の窓を覗きこむように浮かべていたのだ。
綾香ちゃんがノイズの発生源を掌握した者と通じているのはこれで明らかになった。
口封じを避けられるといいのだけれど……。
正義の秘密組織――――っぽい、『特異災害対策機動部二課』に匿名で綾香ちゃんの保護を願い出るという案も考えたけどそれも微妙かもしれない。
今日のノイズ発生は私に特殊な力が宿った事を知る者によって起こされたのではないかと思っている。
だけどそれを知るのは、私が破壊してしまったリディアンの手術室を見た二課の人達だけだ。
二課の情報は漏れている。最悪、幹部クラスが外部に通じているというのも考えられる。

「――――投影（トレース）、開始（オン）」
とにかく、情報が欲しい。知らないコトが多すぎる。
『急いては事を仕損じる』というモノだ。
慎重すぎるぐらいで丁度良

―4―

「記憶を消されただと――――!?」
「はい……、申し訳ありません、フィーネ。ノイズ発生中の事は何ひとつ思い出せず……」
フィーネと呼ばれた全裸の女は、目の前の少女の答えに対して思わず眉間を押さえ天を仰ぐ。
女にとって、これほどの動揺をしたのは本当に久しぶりだった。
「何も得るものが無いどころか、後を付けられて帰ってくるとは……。今日はマンションに帰れと言ったのも忘れたのか?」
「はい、申し訳ありません。……後を付けられて?」
「これだ」
そう言った女の横に密集する画面のひとつに〝それ〟が映った。
それは例えるなら〝鉄の竹とんぼ〟。二段重ねの刃の回転翼が、小さな水晶玉のようなものをぶら下げて浮かんでいる写真だ。
「街の監視カメラにも映っていた。これは飛びながらお前の後を付け、私が死角から叩き落とすまでの間、この館の窓を覗き込んでいたのだ」
その挙動は『回転翼による飛行』とは口が裂けても言えないようなものだった。風に吹かれても傾かず、回る回転翼もそれで飛ぶには明らかに遅すぎる。
「あれも、奴の身体から排出されたものなの
それは二課のレーダーにすら映らない偵察用の聖遺物という衝撃的なもの。
女にとって、水晶部分に〝爆裂〟を意味するルーン文字が刻まれてさえいなければ、回収して解析したい程のものだった。

「あの、フィーネ……。監視カメラの映像で響さん……立花響の事は分からなかったのですか？」
「そうだ」
この時代、町中で監視カメラの無い場所などは殆ど無いのだが。
ノイズが立花響の目前に躍り出たその瞬間から一之瀬綾香（この少女）と別れるまでの間、立花響は一瞬足りとも監視カメラに映っていない。
避けていた訳ではなく、全て破壊されていたのだ。
巧妙に隠されていたものを含めて、立花響の進路上にあった全ての監視カメラが小さなナイフのようなものに貫かれていた。
道のないルートを行ったり、１００キロ近い速度で移動したりしていたのが破壊されたタイミングから窺い知れるが、その手段が分からない以上はあらゆる推測は憶測でしか無い。
ノイズを蹴散らした手段も不明のままだ。

女（フィーネ）の用意した計画は単純だ。
ノイズによって誘導し、ある程度逃げたらノイズで包囲させた所を、子飼いのシンフォギア装者によって退路を作って逃がす。
そしたらまた誘導し、次は目の前で口封じも兼ねて一之瀬綾香を炭と変えてみせるのだ。
その後は、その場に居る居ないに関わらず小日向未来も殺し、装者に回収させた立花響の復讐心に付け込んで洗脳するという筋書きだった。
女の目論見は全て外れた。
それどころか偵察用の聖遺物によってこの場所を知られてしまった。
〝侮っていた〟
一之瀬綾香の兄の報告から、殆ど一般人と変わらないだろうと考えていた。
確信しないまでも、既に立花響はこの館とノイズの関係を疑っているかもしれない。
この状態で一之瀬兄妹や小日向未来に手を出せば、最悪この

『櫻井了子（さくらいりょうこ）としての生』が終わりかねない。
『櫻井了子としての生』は今までに体験してきたどの人生よりも悲願に近付いているのだ、不注意で失うにはあまりに惜しい。
『謎の力を持った聖遺物との融合体』という言葉は女（フィーネ）にとって、甘い毒のようだった。
強い〝力〟が必要で、それでいて複数の聖遺物を確保している自身にとっては危険と分かっていても食いつかざるを得ない。
「使うにせよ消すにせよ、まずは先に二課からアプローチをかけるべきだった
あの〝融合症例〟には未知の部分が多すぎたのだ。
慎重に立花響を特異災害対策機動部二課に招き、それを解明できれば。あるいは自身にも応用出来るかもしれない。
二課で好意的に迎え、解明し、済めば大事を取って殺す。
それが立花響（融合症例）の最も巧い使い方だった。
「融合……症例……、フフ……」
ただの子供がこれだけ出来るように成ったのだ、『現代に蘇った超先史文明期の巫女』であるこの櫻井了子（フィーネ）が聖遺物との融合を果たした場合、正（まさ）しく世界を支配するに余りある力を得ることが出来るのだろう。
「しかし何時、何処から綾香を疑うに至っ

ＥＰＩＳＯＤＥ５　はじめてのチュウ

―１―

「――――あ、起きた？　おはよう、響」
囁くような、心地良い声。
未来の呼びかけで浅くなりつつあった眠りから引き上げられる。
閉じたカーテンの隙間から覗く外はまだ薄暗い。
「……んぅ。……おはよう、みく」
起きたばかりの重い身体を押し上げると、頭に乗せられていた未来の手が離れた。
撫でられていたのだろう、なんだか気持ちいい余韻がある。
「響の寝顔って初めて見たかも、なんかラッキー？」
「……そうだっけ？」
「そーだよ、半年も同じベッドで寝てるのにいっつも先に起きてるんだもん」
ベッドに腰掛けている未来は既に学校の制服に着替えている。
……という事は寝過ごしたかと、壁に掛けられた時計を確認。
５時（ごじ）３０分（はん）、セーフ。
「……あれ、運動部は朝練中止になったんじゃなかった？」
「ん？　……ふふふ！　何時から陸上部が朝練をしていると錯覚していたっ」
「はぇ？」
おっしゃっている　いみがよく　わかりません。
いつも朝早くから校庭を走り回っているアレは『朝の練習』ではなかったと宣（のたま）うか。
寝起きの頭が深い思考を許してくれない、許容限界を超えた思考が空回りしている。
「陸上部は皆で自主練してるだけで本当は朝練無いの。今日はグラウンド貸し切りだぁ」
「……あぁ」

脱力。ベッドに倒れ込もうとする身体を鉄の意志で押しとどめる。
「それじゃ、私コーヒー淹れて待ってるから。響も早くね」
「うん」
そう言って部屋を後にする未来を、ベッドに腰掛けたままボンヤリと見送った。
今朝の未来はなんだか慌ただしい。
「いよいしょー」なんて掛け声で身体を起こして、机の上の小さなビンと5ｃｍ程の曇った水晶玉に気が付いた。昨日の鍛錬の後、しまい忘れていたのだろう。
ビンの中には白い欠片が入っている。手術室から持ちだしたシンフォギアの欠片と、昨日取り出した心臓付近にあった残りの欠片だ。
心臓付近のシンフォギアの欠片はずっと不安のタネだった、本当は気付いた時点で取り除きたかったのだけれども『聖遺物と機械の混ざり物』というその性質から今までずっと摘出する事が出来なかった。
不安が漸く解消されてなんだか少し気分がいい。
ビンの中に8個と6粒あった小さな欠片は、今はひとつの大きな破片に戻してある。
私は魔術の教材としてこれを元の形まで復元するつもりだ。元通りという訳にはいかないけれど、『それっぽいもの』にする事は出来る……と思う。
シンフォギアというものは早い話、『変身アイテム』だった。
普段は掌に収まるサイズのコンバーターで、『呼びかける』とその時の服を記録・分解し、全裸になった装者に戦闘装束を展開。そして解除すると戦闘装束は消失し、記録された服が再現される。
シンフォギアの起動と解除は『エネルギーレベルまで分解され、再構成』という工程を経ているから、再構成に必要な〝要素〟をこの破片に魔術で補填してやれば勝手に元通りになるのではないかと思う。
……たぶん。
シンフォギアの核（コア）である〝聖遺物の欠片（ガングニール）〟までは復元できないとは思うけど、『それっぽいもの』が出来上がる頃には今よりも少しはマシな魔術使いになっているハズ。

制服に着替え終わって鞄を手に部屋を出る。
今朝はパンの上に昨日のカレーとチーズを乗せてオーブンレンジでチンだ、たまにはこういうチープな味も悪くない。軽いのが何かもうひと品欲しいかな？
今日一日家にいる未来母と未来父のお昼にはドリアでも用意しておこう。

「――――ふむ」

はて、と口元に手をやり立ち止まる。
くちびるに小さな違和感。
思い当たるフシといえばひとつある。
この前、寝ている未来のくちびるをツンツンした事があった。もしかしたら実は起きてて根に持ってて遂に今日やり返されたか。
そう考えると今朝の落ち着きの無さにも納得できるような気がする。未来にとってくちびるをツンツンは結構大きな事だったのかもしれない。
少し反省。

―2―

手を繋いで何気ない会話を交わしながらいつもの通学路を歩く。
いつもと違うのは恋人繋ぎになった二人の手。別に恋人繋ぎは恋人同士じゃないとしちゃイケナイなんて事は無いと思うけど、少しハードルが高めにあった気がする。
距離の近さで漸（ようや）く『未来に打ち明けたんだ』という実感が湧いてきた。
「へえ、翼さん新曲出るんだ。奏さん亡くなってから初めてだよね？」
「そうなの！　さっきニュースで言ってて――――」
相変わらず未来はツヴァイウィングを、風鳴翼を推してくる。おか

げで自分もすっかりファンになってしまった。
風鳴翼。
私達よりもふたつ年上の高校一年生、水面のような綺麗な黒髪とサイドテールが特徴的な、衰えを知らない人気をもつ歌手。
彼女と天羽奏のふたりで構成されていたツヴァイウィングは、ノイズによって天羽奏が亡くなってから活動を停止していた。
「――――風鳴翼かぁ……」
「……翼さんも、シンフォギア？　の装者なのかな」
「どーだろねぇ、可能性は高いと思うけど」
風鳴翼は私立リディアン音楽院の生徒で、天羽奏もそうだった。
しかしリディアンの実態はシンフォギア装者を探すための施設。その広告塔だったのがツヴァイウィングだ。
天羽奏がシンフォギアの装者であったのなら、風鳴翼（もうひとりの方）も装者であったとして不思議ではない。
一度にたくさんの情報を手にして結構な事を知っている気になっていたけれど、自分はシンフォギアの装者が何人居て、二課がノイズについてどこまで掴んでいるかなどは検討もつかない。
知らなければならないことは山程ある。

3

やはりと言うべきか朝は学校中が大騒ぎで、出席を取る担任の先生の「～さんは病欠です」や「～さんは大事を取ってお休みです」といった生存報告の度に安堵の溜息が津波のように押し寄せた。
昨日のノイズによる被害は驚くほど少なく、陸上部の皆も、クラスの皆も全員が無事だった。
そんな『何事も無く』とは言い難い朝が過ぎ、睡眠学習で授業をまるっと聞き流してたらいつの間にやら放課後が来ていた。
「んん――――！　よく寝たぁ」
「もう、響ったら……」
今日は天気が良くって、もうすぐ11月になるというのに少し温か

い。皆が無事だった事による安堵もあって、シアワセな眠気が襲いかかる。
人がこれに抗うなんて、どうして出来ると言えようか。
「言えようかっ……！」
「リディアン受けるんでしょ？　響だけ落ちたりしたらイヤだよ」
「む」
それは確かに切ない。
でも二課の人達は既に私の身元を突き止めている筈だし、答案用紙に何も書かずに出しても合格できそうな気も――――
しかし、もうすぐ１１月……。
「ね、未来。今日は部活無いでしょ、この後どっか行かない？」
「え？　……うんっ！　ドコ行こっか」
再来週の１１月７日は未来の誕生日だ。何を贈るかについては大まかに決めてはいるけれど、もう少し欲しい物サーチをしておきたい。
それに、未来にとっても良い気晴らしになるだろう。
未来は未だに、どこか様子がおかしい。くちびるをツンツンしただけでこうなるかな？

―４―

「うへえ……つかれた……っ」
「ふふっ、今日は思いっきり歌って気持ち良かったぁ」
夕暮れ時、茜色に染まった帰り道。
散々歩き回り、思いっきり歌って尚この元気。流石のスタミナは陸上部（RIKUJOBU）故か。
最近になって短距離走の記録が伸び悩んでると言っていたが、未来の打ち込む〝１００ｍ走女子〟とやらはこれほどの体力をもってしても付いて行けないほどの魔境なのか、侮り難し。
昨日のノイズ騒ぎによってまるっと空いた午後の授業と部活動の時間をデートに費やすべく未来と訪れたのは駅前のショッピング

モール。買い物、映画鑑賞、買い食い、買い物のフルコースをカラオケで締めた。
未来がお手洗いに行った隙にコッソリと未来へ贈る誕生日プレゼントも買ったし、カラオケに入った時には未来の様子もすっかり元通りになっていた。
未来へのプレゼントは大きな白いリボンに決めた。
少し主張が激しいかもしれないけれど、未来ならきっと似合う筈だ。
早く渡したいな、喜んでくれるかな？
「どうしたの？」
思わず溢した小さな笑いに未来が尋ねた。
「ん？　んー、いつもの未来だなぁって。今朝から様子ヘンだったもん」
「――――え？」
未来の表情が凍りつく。
言うべきか、言わざるべきか。散々迷って出した答えは間違いだったかもしれない。
「悩みがあるなら相談してよ、力になるからさ」
「……うん、ありがとう。でも――――」
未来は少し困ったような笑顔で『なんでもないよ』と呟いて、口を閉ざしてしまった。
夕日のせいか、いつもと少し色の違って見えた未来の眼は、罪悪感に染まっているように感じられた。

―5―

家族＋1名（プラスわたし）の食卓が終わった夜の21時。
残りカレー再利用ディナーが最も好感触だったのは未来父だった。
味覚が子供っぽい彼にとって好みのド真ん中を射抜いていたようで、半年分の「うまい」数を今日だけで凌駕したような気すらする。
「終わったァ……！」

水切りカゴに洗い終わった最後の食器を乗せてタオルで手を拭う。
昨日のカレーの残りを全て投入した今日の晩ご飯は中々に好評だったけれど、お皿を使いすぎてしまって食器洗い機に入り切らないという事態に陥ってしまって少し焦った。
……でも、先にお風呂に入っていた未来がついさっき上がったみたいだしタイミングとしては丁度良かったかもしれない。
『自分が入るから』では無い。未来のお悩み粉砕（そうだん）のタイミングとして丁度良かったのだ。
私への罪悪感が未来の不調の原因なら、私が許せば万事解決だ。
二階へ上がり、未来の部屋へ。
私に貸し与えられた引き出しを開け、５ｃｍ程の曇った水晶玉を取り出した。
「……それは？」
横でベッドに腰掛けて赤い携帯端末を弄っていた未来が顔を上げる。
不思議そうに覗きこむ未来の問に、小さく微笑んで答える。
「お察しの通り、魔術礼装！　使い魔（ドローン）の眼になるパーツ」
「おぉ」
この水晶玉の持つ機能はふたつ。
ひとつは一方的な感覚共有、〝水晶玉の視点〟を自分の目で見るように覗き見る事が出来る。
そしてもうひとつ、この水晶玉は〝１日分の景色〟を記録している。
「昨日の夜、机の上に出しっぱなしにしたまんま寝ちゃってさ――――」
「出しっぱ……なし……？」
机の上からベッドの上まで、遮蔽物は無い。
もし、未来が感じている罪悪感の元があの眼では無いならこっちの眼（水晶玉）が犯行現場（はんこーげんば）の一部始終を目撃しているに違いないのだ……！
「――――同調（トレース）、開始（オン）。……待機（クリア）」

左肩に張り巡らされた魔術刻印の一部に魔力を通して呪文を唱え〝接続〟する。
水晶玉の曇りはあっという間になくなり、まるで水滴のような透明なものへと変わった。
「……時間設定（タイムセット）。１６時間前、再生開始」
ふたつ目の機能を呼び起こされたそれは、囁きかけるだけで１６時間前のこの部屋を映し始める。
ごとり、と音を立てて未来の手から携帯端末が滑り落ちた。
横目でチラ見した未来の表情はこの世の終焉めいて絶望的だ。
流石に緊張する、だって未来がこんな表情をしたところは見た事が無い。
いったい眠れる私のくちびるはどんなスゴい事をされてしまったのか……！
「……停止。１０分後、再生開始――――このあたりかな」
「――――え……ァあ……ッ」
映されてる時間は今朝の５時２０分チョイ。
丁度未来が体を起こして眠そうに首を傾げているトコロだ。
横にまだ私が寝てる事に気付いた未来は、誰が見ている訳も無いのに部屋の中を見渡して。
両手を胸に当てゆっくりと深呼吸をして息を整え……。
ごくり。
隣で眠る私の上唇（うわくちびる）を軽く、啄（ついば）んだ。
「っ……ァ……あぁッ……」
横で一緒に見ていた未来は、ぽろぽろと涙をこぼし始めてしまった。
水晶玉の方の未来さん、『スゴい事』はまだですか。泣いてる子もいるんですよ。
水晶玉に映る未来は両手で頬を覆ったまま顔をブンブンと動かしている。
なんというか、「きゃー！」なんて声が聞こえてきそう。とても、かわいい。

「――――ごめッ……なさ……、ごめん……なさいッ……」
横で泣いている未来と対象的に、水晶玉に映る未来は幸せそうな表情で私の頭を撫でている、これ以上なにかする様子もこれといって無さそうで。
悩める未来の為に用意していた殺し文句が頭からスポンと抜け落ちてしまった。
つまり、未来の罪悪感の元って。

「……これだけェ？」
「――――え……？」
つい、そんな事を言ってしまう。
悪いとは思うのだけど、流石に拍子抜けというか。
「だって――――未来ったらすっごい深刻そうな顔してたから。私、『どんなスゴい事されちゃったの？』ってドキドキして……っ」
「す……スゴい……事……？」
「すごいこと」
スゴい事、乙女の口からはとても申し上げられないような『スゴい事』を――――！
「……別にこんな事で責めたりなんかしないから、未来も自分を責めないで？」
それに、涙を流す未来を見るとこっちこそ罪悪感で潰れてしまいそうだ。
もう少しハイリョした方法を考えるべきだった。つらい。
「こ……こんな事って……。女の子同士でこんな……き……キスなんて、変じゃない……！　響は気持ち悪くないの……？」
「ないッ！」
未来にそんな趣味があったなんて驚きだし、変わってるとは思うけど。
「私の事……怒ってないの……？」
「怒っ、て……ないっ」
「――――」

いけない、目が泳いだ。
一大イベント（ファーストキス）への執着が纏まりかけていた場を崩してしまう。
「そりゃあ、ファーストキスっていったら一世一代の大イベントだし。寝てる間に済ましちゃったなんて、ちょっと……かなり……ショックだけど……」
「うぅ……」
確かに、ファーストキスは惜しい。けど未来の苦悩に比べれば些事もいいところだ。
思わず溜息が漏れる、遂に言うべき言葉が分からなくなってしまった。
こういう時こそ、『衛宮士郎の経験』に頼りたくなるのだけれど。彼は女心に関してはド素人で、役に立つようなテクニックは皆無。それどころか恋人とのあまりに辛すぎる死に別れの経験が閲覧できてしまって、余計にアタマを鈍らせてしまう。
「――――ね、未来はさ、キスがしたかったの？　それとも……私としたかったの？」
「そ……それは……」
停止寸前の思考が適当に叩き出した最適解（ざれごと）を実行に移すべく、未来の肩に手を置いて尋ねる。
『無意味な問い』だったと気付くのは早かった。だから。
「私は……、私は響と――――っ!?」
その『無意味な答え』を遮って、未来の口元に喰らいついた。
――――これで私が加害者だ。
報復のキスは、朝よりも深く。
確かめるように、刻み込むように、未来が息苦しさに音を上げるまでかわし続けた。
「――――んっ……ふぅ。えへへ……ファーストキスは返してもらったっ！　なんて」
「響……」
耳まで真っ赤にした未来が熱のこもった瞳で私を見上げている。
顔が熱い、きっと私の顔も同じぐらい赤くなっているのだろう。

思ったよりも恥ずかしくって、未来と目を合わせられない。
アタマから湯気が出そう……。
「……おッ――――」
「……お？」
「お風呂、私も入ってくるね……」
「……うん」
それから、床に転がってる未来の携帯端末を拾って返し、水晶玉を引き出しに閉まって逃げるように部屋を出て浴室へ向かった。
お風呂から上がって落ち着いたらもう一度、宿題でも片付けながら未来と軽く話をしよう。

―6―

「できたッ……」
未来がくぅくぅと寝息をたて始めた２３時、未来を起こさない為の小さな明かりだけで照らされた薄暗い部屋の中で桜色の水晶玉を掌に転がしながら呟いた。
この水晶玉は今朝の『ファーストキス窃盗事件』の目撃者だ。この出来事の前後における未来のあまりに可愛らしい挙動を永久保存すべく水晶玉に加工を施し、分かりやすく色を変えたのだ。
「……やっぱり、早まったかなぁ」
『私から未来にキスをして、加害者を交代する』という案を思いついた時は、物凄く冴えた最良の収め方だと確信していた。
でも、それは色んな要素に揺さぶられた結果として手にとってしまっただけの不器用なやりかただったのかもしれない。
少なくとも、あの選択は最良では無かった。
でも、間違ってもいなかったと思う。
あの後、一緒に宿題を片付けていた時の未来はいつもどおりの親友だったし、寄り添って床についた時も未来の素振りからは、朝からあったぎこちなさが抜けていた。
「未来は……」

未来は、私に恋をしているのか。
未来は、私とどうありたいのか。
長いこと一緒にいるのに、未来の理解者として未だ不足している自分が不甲斐ない。
「さて、と――――」
答えの出ない自己問答を切り上げて、水晶玉を小さな箱に収めて引き出しにしまい込んだ。
やらなければならない事が出来た。
今日の魔術の鍛錬はナシだ、使い魔（ドローン）作りも今度でいい。
未来の為に買った誕生日プレゼントの包装を丁寧に開き、幅の広い白いリボンを広げる。
このリボンに今から魔術礼装としての機能を加える。調べられてもある程度は誤魔化せるようなものに仕上げる為には、今晩から始めないと誕生日に間に合わないかもしれない。
付与するのはささやかな効果。
でもリディアンを志望校とする未来が平穏に生きる為には、これは必須だ。

EPISODE6　無間の鐘の音

―1―

世界の始まりから今に至るまで、全ての魂は何かに生まれ変わり続けている……らしい。

その魂のリレーにおける原点にあるものこそ〝起源〟という本能であり、あらゆる存在は起源に少なからず在り方を縛られている。

例えば、衛宮士郎から〝剣（つるぎ）〟という起源を継承した立花（わたし）響は刃物への関心が強くなった。

今の私は料理に使う包丁にちょっとしたコダワリを持っているし、自分の操るゲームのキャラクターには斬撃武器を持たせる事が多い。

とは言っても『眺めてウットリ』とかはしないし、無闇に剣を触りたいとも思わないけれど。

半年前までの私は、恐らく〝食卓〟あたりが起源だったと思う。

そう考えれば『食べる事が好きで、誰かと一緒に食事をするのはもっと好き』という私の個性が形作られたのも道理だ。

そして、未来の起源は〝追想〟だった。

確かに未来は記憶力が良い方だし、思い出や記念日というものを尊ぶ傾向がある。

２週間前もそんな感じが……しなくもなかった。

お姫様抱っこ、秘密の共有、初めてのキスといった〝思い出〟を手に入れて舞い上がっていたり、親友（わたし）からその『初めてのキス』を取り上げてしまった事に対する過剰なまでの罪悪感だ。

そんな未来の記憶力……、正確には『思い出す能力』があれから飛躍的に向上した。

起源が強く表に出てきたという訳では無い、未来は今まで通りの未来のままだ。

未来の『思い出す能力』は〝超能力〟だった。

何かをきっかけに眠っていたものが目覚めたのだろう。
思い出に浸る時、未来の虹彩（こうさい）は緑色に染まり、瞳孔の奥で小さな光が灯る。
本来は視界に入れたものに起源の具現化を起こさせるという〝魔眼〟なのだけれど、未来の場合は外界ではなく内界……つまり自分自身に向けて〝追想〟という現象を起こしている。
何処を狙っても自分自身に〝追想〟という結果のみが発生するらしい。
便利な能力かもしれないけれど、希少性の権　ころか、本来あり得ないものであるそれは未来の身の安全の為にもその存在を厳重に隠蔽しなくてはならない。
今日、未来に贈った誕生日プレゼントのリボンにはその為の機能を持たせてある。
これを付けている限りは、優秀な魔術師でも未来の眼に気付く事は難しいだろう。
――――大きな白いリボンは思った通り、未来の綺麗な黒髪に良く似合っていた。

―2―

「むぅ、外すのが惜しいっ……！」
「あはは、気に入ってくれて嬉しいけど寝る時ぐらいはね。――――未来、今日はどうだった？」
「おいしかった！」
響に付けてもらったリボンを渋々外してベッドに向かう。
１１月７日、１４歳の誕生日は実に美味しい誕生日だった。
なんでも響は今日の為に食費の余りを溜め込んでいたそうで、出てきた高級食材１０割のそれに家族全員が一瞬盛り上げる事を忘れかけた程だ。
響の卓越した調理の腕前に、響が言う「材料費聞いたら味分かんなくなっちゃう」というような食材が投入された事で出来上がったもの

は、知っている筈の料理すら初めての味に感じる程の逸品だった。
誕生日の夜にケーキ以外のものをあれほど口にするとは思わなかった。
おいしい料理、素敵なプレゼントに、祝ってくれた皆の笑顔。たくさんの幸せを貰ったけれど、もう一声欲しいと思うのは欲張りだろうか。
「その……あのね？　響、その――――」
「んー？」
ベッドの上にぺたりと座った響が首を傾げて私を見ている。
２週間前に初めて響とキスをしてからも、響は私が求める度に応えてくれていた。
けれど、何度目からだったか。それが私を慰める為だけのものだと察してからは、遠慮してしまって自然と数が減っていった。
だからといって、別に二人の間に壁が出来るような事は起こらない。
ただ一方的なそれは『違うな』と思っただけ。
でも、やっぱり。たまにはしたいというか。
今日ぐらいは良いんじゃないかな？　なんて思ってしまって。
「みーく」
そんな事を考えて言葉を詰まらせていた私を、
「――――、ん」
響はゆっくりとベッドに引き込んで、唇を重ねた。
少しだけいつもと違う短いそれは、いつもよりもずっと深いものに感じる。
「ぁ……」
後に残ったふわふわとした不思議な感覚。
終わってしまった一瞬が惜しい。
ベッドの上でふたり、額が付く程の距離。
互いが、互いの息を吸いながら、どれだけの間そうして顔を合わせていたのか、
「――――未来は、どうしたい？」

堪え切れなくなった響の、少しだけ目を逸らして囁かれたそんな言葉には小さな期待が篭っていた。
素敵な思い出を締めくくる、甘い蜜のような夜。抱え切れないほどの幸せ。
……これで目覚めも幸せなら最高だったのだけど。

―3―

――夢を見ている。
こういうのを〝明晰夢〟と呼ぶのだったか。
意識ははっきりとしているのに、現実感はまるで無い。
小さな教室に、小さな机と小さな椅子。
それに座る少女の身体も相応しい小ささだ。
慌ただしい小学校の放課後。この光景を識(し)っている。
追想の眼を得てから、幾度と無く思い返した光景だ。
『――、――――――？』
『――――――――――』
話しかけてくるのは輪郭も、大きさすら分からないモヤモヤとした白い何か。
私はこの子達を知っているけど、少女には記憶が無いから今はこの子達を観れないのだろう。
「――、――――。(あー、ごめんっ。)――――――!(また今度!)」
少女はいつもなら二つ返事で了承する白モヤの誘いを断って、大急ぎでランドセルを背負う。
今日の少女には目的があった。
いつも独りでいる『あの子』と友達になる事だ。
別に同情ってワケじゃない、この衝動に理由なんて無かった。
ただなんとなく、気になるあの子と仲良くなりたいと思っただけ。
「……よしッ!」
小さく気合を入れてあの子(ターゲット)の元へ、脳裏には一日中練り続けたお誘いの言葉が離陸準備中だ。

「みーくちゃんっ、一緒に帰ろ？」
「ええっ!?　えっと……？」
少女(ひびき)が声をかけたのは、今よりもずっと小さい私。
なんだかオドオドしていて、こうして見せ付けられるのは結構恥ずかしい……。
「ど、どちらさま……？」
「――――」
「えっと……」
思わず返した「どちらさま」という失礼な言葉に響も固まった……と私は思ってたのだけど、どうやら本当の理由は違ったみたい。
さっきまで脳裏にスタンバイしていたお誘いの言葉はスッポリと抜け落ちてしまっている。
「(言いたい事) 忘れちゃった……」
「(自分が誰か) 忘れちゃった!?」
私と響が初めて互いを知り、言葉を交わした原点の日。
言葉の意味が分かってみれば、まるでコントみたいなすれ違いをしている。
私の人生には、常に響が傍に居た。
響と出逢う前の私は、生きていなかった気さえする。
これは、私自身の始まりの日でもあった。

―4―

――――夢を見ている。
少女の夢から、少年の夢へ。
炎の壁に閉ざされて、崩れていく街を少年は歩く。
まだ夜明け前だっていうのに、空には太陽がある。
灼熱の呪いを流し続ける、真っ黒な太陽。
〝助けて、死にたくない〟
〝この子だけでも連れて行って〟
涙を流しながら奥歯を噛み砕き、両手で耳をふさいで助けを求める

声を無視して歩き続けた。
夜が明ける頃には火の勢いも弱くなった。
立ち上る炎の壁も低くなって、建物があった場所には瓦礫の山がある。
その中で少年だけが原型を留めている。
運が良かったのか、それとも住んでいた家の場所が良かったのか。
とにかく生きていた。
生き延びたからには生きなくちゃ、なんて思って少年はあてもなく歩き続けた。
辺りに散乱する黒焦げに仲間入りしたくないからという訳では無い。
そもそも『死にたくない』なんて思える程、少年は正常のままでは居られなかった。
少年は生き延びて、
代わりに心が死んだのだ。
何もかも失ったその地獄が、衛宮士郎の原点だった。

―5―

「未来ッ！　起きてっ……未来！」
隣に眠る未来を揺すり起こす。
時計が指す時間は朝とも深夜とも言い辛い夜明け前の3時５０分、なにか変だと飛び起きたら嘔吐（リバース）3秒前の未来がいた。
「グ……げほっ……、く、くさい……」
「そりゃそうだ……未来、大丈夫？」
気付いたのが早かったのか、それとも未来に備わっている膨大な女子力によって塞き止められたのか、解き放たれた暗黒物質の量は僅かだ。
起きたばかりでだるそうな未来を支え、背を擦りながら部屋を出て二人で1階（した）のリビングへ。
ソファーに未来を座らせて、水を注いだ電気ケトルのスイッチを入

れる。
お湯を沸かして二人で何か飲もう、紅茶かココアか……何が良いかな？
「それじゃあ、ちょーっと片付けてくるから座って待ってて」
「で、でも……」
「いいからっ」
今こそこれまでの修練の成果が試される時ではなかろうか。
あまりバタバタしてしまうと未来の精神衛生上、大変よろしくない。雑巾その他装備を手に、階段を全くの無音かつ１２段飛ばしで駆け上がり未来の部屋に戻る。
「……うへぇ」
――――私は未来に恋をしていた。
『未来が私に』ではなくて、『私が未来に』恋をしている。
未来も私への恋心を持っているのかもしれないけれど、ともかく私は恋に落ちた。
未来の為なら何だってしてあげられる程の固い友情があるし、今では何もかも差し出せる程の深い恋心を抱いている。
……だけど胃の内容物まで愛せるかと問われれば、黙秘せざるを得ない。
もらい暗黒物質をしてしまわない様に覚悟を決めて、前へ。
換気の為に小さく窓を開け、ブツと汚れたものを回収して投影魔術で一時的な代わりを用意する。
〝剣〟というカテゴリからかけ離れてるとはいえ、宝具とは違って〝神秘（魔力）〟を含まず、難解な構造をしてる訳でもない枕やシーツの投影は実に簡単だ。
「こんなモンかな？」
我ながら大した手際の良さだと内心で自画自賛しながら１階（した）に戻り、洗濯機に洗剤と洗濯物を放り込んでスイッチ。
丁度沸いたお湯で二人分のマグカップにココアを作って未来の元へ戻る。
「おまたせ。はい、あったかいものどうぞ」

「ん、ありがと……任せちゃってごめんね？」
「いいのいいの、私が勝手にやったんだしさ」
それに大変なのは未来の方なんだ……と思ってたのだけれど、未来は結構大丈夫そうだ。
昨日のケーキの残りを出して美味しそうに頬張っている。
というよりも――――
「――――なんか楽しそう？」
「そ、そうかな？」
〝眼〟を使っていたのか、うっすらと緑色になっていた未来の目の色が戻る。
今は４時チョイ。起きるのには早い時間だけど、今から寝るというのもどうなのだろう。
せっかくだから今日の朝食には手間のかかるものでも作ってみようか。
「……ねえ、響は初めて逢った日のこと覚えてる？」
「未来と初めて会った日？」
「うん。あ、初めて話した日かなぁ」
唐突だなぁと思いつつも、頭をひねる。
未来とお互い名乗り合って初めての話をしたのはもうずっと前の事、何年生だったかは思い出せないけれど小学生だった頃だ。
「……勿論、覚えてるよ。確か――――私から声を掛けたんだよね、なんでだっけ……？」
私は半年前に『ライブ会場の惨劇』で記憶を失ったけれど、未来との思い出だけはその全てが無傷のまま残っている。
だけど、流石に幼少の頃の記憶はもう何もかもが曖昧だ。大切な思い出なのに今では虫食いだらけの文字の羅列に過ぎない。
こんな時、未来の〝眼〟がちょっと羨ましい。
答え合わせも聞きたいけれど、未来の意外そうな表情も気になる。
「……ちがった？」
「え？　ううん、合ってる……。覚えてたんだ、びっくり」
ふふん、と得意げに鼻を鳴らす。

自分にとっては結構な一大イベントだった気もする。
さっき思い出していたのはその事かと思ったけれど、後に続く言葉で否定された。
「夢を見たの」と切り出された未来の話は、未来の知る筈のない私の心境や言葉のすれ違い。私の視点からの思い出だった。
「これも響のプレゼントって訳じゃないの？」
「まさか、流石にできないよ」
人の夢をどうこうする魔術も無いことは無いけれど、自分には使えないし、その魔術を備えた魔術刻印も持っていない。
「原因不明？」
「こじつけることなら出来なくも……ないけど……」
思い当たるフシといえば寝る前にしたキスだ。
体液の交換には魔力の行き来がある。その魔力に対して、追想の眼が作用したのかもしれない。
……思い出したら顔が熱くなってきた。
「未来、体おかしいトコ無い？　さっき吐いたのってもしかして……」
「う、ううん。それは偶然だから大丈夫。うん、偶然」
「なら、いいんだけど……。ヘンだと思ったら言ってね？」
万が一があるかもしれない。例えば脳に負担がかかるとか、大半が悲惨なシーンの『衛宮士郎の記憶』を夢に見るとか。
私の記憶を夢に見るならそう考えられない話じゃ無い。
何か対策を考えておいた方が――――
「……ね、もっかいしたら、また見れるかな？」
「――――へっ？」

―6―

「――――I am the bone of my sword.
I am the bone of my sword.
I am the bone of my sword.」

部屋の隅に座り込んで、その呪文を口にする。
胸の高鳴りが収まらない。
魔術回路を励起した状態で一言唱えれば一気にクリアになる筈の思考は、完全にストライキを決め込んでしまった。
手元にはうっかり作りすぎた１２機の新しい使い魔（ドローン）が転がっている。
投影したパーツを組み立てて、左肩の魔術刻印から必要な効果を付与した後は巡回ルートを決めて放すだけだ。
かといって現段階で監視しておきたい場所がそんなに在るわけでも無く、せいぜいが二課とその関係者まわり。
こんなに作っても置き場に困る。
「うぅ……ケーキの味がする……」
不意打ちとはいえ『今更キスの１度や２度が何だ』とも思うのだけれど、意識した途端に恥ずかしくなってくるのはなぜだろう。
なんだか私が魔術関係の事を白状してから未来は大胆になった気がする。
後ろで幸せそうに二度寝を始めた未来が少し恨めしい。
「私も二度寝しようかなぁ」
大したことじゃ無いけれど、全てを打ち明けてスッキリしたからか、２週間前のあの日から『恐慌に叩き起こされる』という半年間続いていた日課が途切れ始めたのだ。
今から大好きな未来の隣で二度寝に便乗すれば、幸せな朝寝坊が出来るような気がしないでもない。
「……イヤイヤ、寝坊しちゃ駄目でしょ。朝ごはん作ろ」
頭を振って誘惑を断ち切る。
そんな事よりも、いつもより少し手間をかけた朝食で食卓に笑顔を提供しよう。
その方が朝寝坊よりも幸せだ。

ＥＰＩＳＯＤＥ７　澄んだ不協和音

―１―

深い罪悪感と共に、私に入ってきた膨大な知識と経験。
パンクしそうな頭と無数の剣で裂かれた体が痛かった。
彼の罪悪感を否定する言葉を届けられなくて胸の奥が痛かった。
幸せへの切符をくれたその人に「ありがとう」が届かない事が悔しかった。
あれから２年。
涙する事が増えた。
血を流す事が増えた。
それでも今、私は誰より幸せです。

―２―

「――――投影（トレース）、開始（オン）」
普段なら魔術の鍛錬を始める午前０時、真っ暗な部屋に全裸で立ち、魔術回路を励起する。
回路に負担をかけないようにゆっくりと、そして最小限の魔力を以って投影魔術を完成させる。
「工程放棄、投影完了……っと、よしッ」
投影したのは体の殆どを覆い尽くす大きなコート。
全裸にコートという変質者の様な格好には抵抗を感じるけど、誰に見られる訳でもないのだしこのぐらいは我慢だ。
それに、どうせすぐに着替える訳だし。
「それじゃあ、行ってきまーす……」
眠る未来（みく）を起こさないように音を立てずに部屋から抜け出し、階段を降りて玄関へ。投影した膝の上まである黒いフラットヒールのブーツで家を出た。
……別に私の趣味って訳じゃない、このブーツは防具として機能す

る〝概念武装〟の一部なのだ。
「うー、さぶ」
追加で投影したマフラーを巻いて全速力で走り出す。
魔力の無駄遣いだけどこのぐらいはいいだろう、寒いのがいけない。
今は気温も5度を下回る3月初、道の端にはこの間の雪が未だ溶けずに残っている。
『ライブ会場の惨劇』からもうすぐ2年、未来に魔術を打ち明けてから16ヶ月と2週間。
二課の事や、社会の裏側の仕組み。調べられるものは調べ尽くした。
多くの場所に忍び込んで、多くの資料を読み漁って。
それでも――――
何の進展もない16ヶ月だった。
16ヶ月前の初陣でノイズの発生源を掌握している存在に気付いたまでは良かったのだけど。そこからの対応がマズかった。
あの館について探ろうにも、そもそもあの場所に館なんて無い事になっていたり。
綾香ちゃんに暗示をかけて聞き出そうとすれば、既に対策されていてかからなかったり。
そして直接乗り込もうと駆け付けたら館はクレーターにリフォームされている始末。
手繰り寄せた手がかりは極僅か、『フィーネ』と呼ばれていた米国の聖遺物研究機関に籍をおく異端技術者（ブラックアーティスト）が住んでいたという事だけだった。
「……と、この辺りでいいかな」
走る足を止めて手頃な建物の屋上にむけて跳躍し、監視カメラの死角で身に纏っていたコートとマフラーを消す。
全裸にブーツ。
誰も見てやしないと分かっていても流石に恥ずかしい。
首から下げたお守り代わりの赤い角柱のペンダントを外し、すっぽ

んぽんの上に防具……〝概念武装〟を投影する。
袖の長い指ぬきグローブに、顔を覆い隠す黒い布。胸部と首周りを覆う、肌に密着したボディーアーマー。
そして、家から履いてきたブーツと、ホットパン
――――否、パンツ。
この面積は下着とか水着の方のパンツだ。
その黒い装備一式に、腰には鎧騎士のサーコートのような紅い外套。
風にはためくコレは外界に対する一級の守りとなるありがたい外套で、下半身の肌色を減らすのにも一役買ってくれている。
「ふぅ、かいてき」
この破廉恥ルックにも慣れたものだと思う。
初めて着た時は上に別のものを羽織って肌色を隠していたけれど、すぐに邪魔に感じて止めてしまった。
防寒としても機能するし、最近は結構格好イイんじゃないかなんて思い始めたぐらいだ。
家からコートの下に着てこれればもっと快適なのかもしれないけど、これが二課のレーダーに引っかかる以上はそういう訳にもいかない。
顔を覆う黒布が左右のヘアピンを締め付けていないか確認する。
このヘアピンはクリスマスに未来から貰った大切なものだ。
右側が〝N〟を斜めにしたような形で、左側はその反転。……本当は左側が本来の形で、反転してるのは右側なのだけど。
外していたペンダントを腰の横、外套の下に隠して再び駆け出す。
時間には少しだけ余裕があるけど、それほどのんびりしていられるという訳でもない。
ノイズの出現位置はまだ先だ。
あれからノイズは2～3ヶ月おきに出現している。
その度に、私は関東全域に飛ばしている『ノイズを探知できる使い魔（ドローン）』でそれを見付け、誰よりも早く現場に駆け付けた。
二課の掃討よりも早く、

一課の避難誘導よりも早く。
直線距離を通って駆け付ける為に街のド真ん中を突っ切り、混乱状態の現場で逃げ惑う人々を庇いながらノイズを殲滅していく自分は世間じゃ『正義の味方』なんて呼ばれている。
確かに数えきれない程の人を助けたかもしれない。
対ノイズに効果を発揮する武装は公式には存在していない事になっていたのもあって、世間は現れた〝例外〟に対していやに好意的だ。
血を撒き散らして人を庇う姿が同情を買ったというのもあるらしい。
そんなの違う。
人の命を勝手に勘定する私は、とんでもないエゴイストだ。
初めての時、たった1人を生かす為に10人を死なせた。
次の戦いで、5人と7人どちらを生かすか決断出来ずに両方死なせた。
だから、少ない方は見捨てる事にした。
ひとりでも多く助けたいから、私は迷いなく少数から明日を摘み取る。
死んでいった人の中には、私が駆け付けなければ助かっていた筈の命すらあった。
悔しいし、悲しい。
だけど薄情者の私は1日か2日で泣き止んで、悲しかった事も忘れて呑気に笑う。
そんな汚物が正義(ヒー)の味方(ロー)である筈がない。
……未来が居なかったら、私はとっくに折れてしまっていただろう。
「――――ああ、でも」
でも、今日は。
ノイズが現れたのは巨大な公園のド真ん中。
この時間帯に唯一人の居そうな事務所は、進行方向とは逆にある。
今日は、今日だけは。

私は胸を張って正義の味方（セイギノミカタ）ができそうだ。

―3―

「はぁ……はぁっ……。き、キツい……」

目的地から4キロ手前の繁華街、辺りで一番高いビルの屋上で足を止めて乱れた息を大急ぎで整える。

全速力とはいえ1時間も走っていないのになんてざまだろう。

未だ視界に映らない二課の装者輸送ヘリに小さな嫉妬が浮かび上がる。

アレは今、何キロ先にいるのだろうか。

時速290キロの移動手段を持っていながら人が死に終わってから駆け付ける装者が恨めしい。

「ふぅ……投影（トレース）、開始（オン）――――」

再び魔術回路に熱を入れ、黒一色の巨大な洋弓を手元に投影し、人を超えた視力と集中力をもって4キロ先の現場を視る。

ゆっくりと歩を進める半透明の人工怪異（ノイズ）の一団は丁度公園の出口に差し掛かっている。

道中で上空の使い魔（ドローン）の視界を借りて確認した通り、ビルのようなサイズの大型個体が4体、その内の2体が小型のノイズを次々生産する芋虫のような形をした増殖タイプだ。

周辺の街では既に避難誘導が行われており、放っておいても一般人に犠牲は出ないだろう。

ならUターンしてさっさと帰ってしまいたくもあるけれど、そしたら現場で小銃やら榴弾発射機やらでちょっかいを出している一課の部隊から死人が出そうだ。

無駄な事だけど何がしたいのかは分かる。

覆面（わ）の少女（し）が現れなかった場合に備えて、ノイズの進路を街から逸らそうという事だろう。

政府にとっては街の破壊よりも自衛隊員の殉職の方がいいらしい。

「……冗談じゃない」

そんなの冗談じゃない、せっかく今日は涙を落とさずに帰れそうなんだ。
全員生きて帰ってもらう。
構えた弓に、矢の代わりに刀身の捻れた螺旋の剣をつがえて、ありったけの魔力を込めながら引き絞る。
吹き荒れる蒼い風は、目視できる程に濃い溢(あふ)れた魔力だ。
「――――I(我)am the bone(鉄)of(崩)my(れ)sword(歪).」
口にした呪文に応えるように、引き伸ばされ、矢に相応しい形への姿を変えていく螺旋の剣。
剣先を地を這う増殖タイプの大型ノイズへ。
4キロ、この距離なら外さない。狙いを定める必要も無い。
パズルのピースがハマるような、この中(あた)る確信がある以上、後は指を放すだけでこの一矢は核となる部分を丸ごと抉り取るだろう。
「〝偽(カラド)・螺旋剣(ボルグ)〟――――!」
その真名を口にし、鉄の幻想を解き放つ。
音を超えて飛び込んだ一矢は、瞬き程の時間すら掛けずに縦に2体並んだ増殖タイプの大型ノイズに到達し、その両方に巨大な風穴を開けて崩壊させていく。
そして――――
【壊れた幻想(ブロークン・ファンタズム)】
――――着弾と共に爆散し、巨大な火球に姿を変えて周囲のノイズを呑み込んだ。
16ヶ月前の初陣で投擲した干将・莫耶でやった事と同じものだけど、その規模は桁が違う。
着弾地点にはクレーターが出来、木々は折れ、一課の隊員達が慌てながらも見事な動きで撤退を始めていた。
「ッ――――」
やっぱりだめだ。
視界の先、着弾地点のクレーターからは再生を終えたノイズが這い出してきている。
〝位相差障壁〟で、爆発のダメージを大きく軽減したのだろう。

三次元を超えた場所にその存在の殆どを退避させる事で、通常物理法則下における攻撃をほぼ無効化してしまう、ノイズを人類の天敵たらしめる〝盾〟。

あれだけの破壊力を持つ螺旋剣の爆発であっても、干将・莫耶の爆発と比べてノイズの破壊数は大差ない。

〝干将・莫耶〟がノイズを壊せるのは、元となった『未改造（オリジナル）の干将と莫耶』が怪異を倒すための武器であり、ノイズが怪異を模して作られた兵器であるからだ。

つまり、残滓として剣に残る『怪異を滅する』という〝概念〟を以ってノイズを裂く。

〝偽・螺旋剣（カラドボルグ）〟にはそれがない。

直撃であれば空間ごと断つ事で破壊に至るダメージを与えられるものの、その後のただ強いだけの爆発では干将・莫耶に一歩譲る事になる。

あの群れのノイズ全てに〝偽・螺旋剣（カラドボルグ）〟を直撃させていくような魔力は無い、後はいつものように現場で足止めだ。

弓を消し、〝干将・莫耶〟の設計図を脳裏に用意しながら再び風を斬って駈け出した。

―4―

「ふッ――――」

弾けるように地を蹴り、ノイズの群れを削り取っていく。

最初は苦戦していたノイズの処理も、そのＡＩ（知能）が単純なのもあって小型を破壊するだけなら何ひとつ苦にはならない。

後ろの方で足を止めている残り２体の大型ノイズは難敵だけど、幸いにしてしばらく動きそうにない。

目的は足止めであり殲滅ではないのだからこれは後から来る装者に任せていいだろう。

視界の端にうっすらと二課の装者輸送ヘリが見えているから、もうすぐ〝彼女〟も着くはずだ。

一太刀で数体づつ、押し戻すように誘導し、最効率で次の的(まと)へ。
雑音(ノイズ)の名が示す通り、それらはおよそ生き物とは思えない呻き声を漏らし崩れていく。
「――――」
滑るように踊り出て行く手を遮ったのはずんぐりとした耐久特化タイプ。
小型の中では大柄な方だけれど、同格の人型二種のような破壊活動の為の爪や、殺す人間を羽交い締めにする為の掌といった〝武装〟を持たず、飾りのような短い触手が生えているだけだ。
最も警戒すべき融合による大型ノイズの発生を避けるために譲った一手。
迂回も後回しにも出来ない配置。
一太刀では潰れず、かといってもう一手かければ再生してしまう。
――――そんなモノを仕留めるなら方法はひとつ。
双剣を持つ手を広げて腰を落とし、魔力を込めてその〝性質〟を目覚めさせる。
「やァァァッ！」
払いの一閃は左右から、渾身の力を込めて挟み、重みを増した斬撃が敵を喰らう。
分かち難い夫婦剣である〝干将・莫耶〟には互いに引き合うという性質が秘められていた。
最初はこんな斬り方で力が入るのかと疑問だったけれど、今ではこの戦技の〝理〟がよく解かる。
「――――はぁ……ッ……ふふっ」
命が奪われる所を見てないからだろうか、今日は何時になく体が軽い。フルマラソン４本分の距離を駆けてきたのが嘘のようだ。
湧き上がった小さな高揚感は『前回もこれだけ動ければ』という後悔に即座に掻き消されたけれど、この動きはもう私のものだ。
動き出した大型ノイズの行く手を阻むように位置を変えながら、駆逐する手を早めていく。

―5―

ノイズが残り3割程になった頃、漸(ようや)く二課の装者輸送ヘリが到着した。

芝生を巻き上げる程の低空飛行、開け放たれたドアから身を乗り出しているシンフォギア装者が操縦士(パイロット)に向けて何かを叫んでいる。

どんな事を言っているのかは、だいたい予想できる。

「――――I(体)am(は)the(剣)bone(で)of(出)my(来)sword(て).」

ちょっと近すぎる。

直下から装者輸送ヘリを叩き落とさんと腕を振りかぶる大型ノイズ、あれでは生きた心地がしないだろう。

超人揃いの二課の操縦士(パイロット)がこんなミスをするなんて珍しい。

「〝熾天覆(ローアイアス)う七つの円環〟――――!」

ノイズの包囲から抜けて手をかざし、花弁の盾を剣の園から引き上げる。

7枚の花弁から成る輝く盾に受け止められた大型ノイズの巨大な腕と、砲弾のような形態になり突撃した小型の群れは激突の衝撃に耐え切れずに炭となり四散した。

身を翻すかのように進路を変え、撤退していく装者輸送ヘリ。

そのドアから飛び降りた装者はまるで、舞うように花弁の盾に降り立ち――――

――――いやいや、乗らないで。

この盾、結構魔力を使うんですよ。

「Imyuteus(羽撃)amenohabakiri(鋭く風切る)tron(如く)」

――――小さな歌が、戦場(いくさば)に奏でられた。

鈴を振るような歌声と共に、花弁のステージの上で眩い光を放ちながらシンフォギアの装着を完了させる戦姫。

「……あぁ」

それは、ここが命懸けの現場であるという事を忘れてしまいそうな

程に綺麗な光景だった。
――――まあ、同じ女として。大きな花に乗ってみたいという気持ちはよく分かる。
遅れてきたお詫びにいいモノを見せてもらった……とでも思っておこう。
蒼いシンフォギアを纏った装者は、魔力の供給を絶たれて消えていく花弁の盾から飛び降り、刀のひと振りで再生中の大型ノイズを切り捨てて、私の隣に並び立った。
「ごめんなさい、待たせたかしら……融合症例？」
いつからだろう。
翼さんの鎧う、黒地に青と白といった見た目をした『天羽々斬』のシンフォギアは、初めて見た時とは少しデザインが変わっていた。
肌に密着した薄いインナーからは僅かながら黒色の占める割合が減り、足を覆い尽くしていた黒い装甲は白を基調としたものに、踝（くるぶし）からは伸ばせば2メートル近くになる二つ折りの刃が生えている。
「何時も通りですよ、翼さん」
「……、……耳に痛いな」
何時も通りの翼さんだ。
テレビで聞いたのと同じ凛とした声も、主役だからとばかりに遅れてくるのも何時も通り。
翼さんは意外そうな目で私を一瞥すると刀を構え、空気を読むかのように待ち構えていたノイズの群れに切り込んでいった。
「……む」
そういえば、言葉を交わしたのは初めてかもしれない。
いつもは死んでいった人達の事で頭がいっぱいで、声をかけられても答えられないでいた。
「……むむ」
となると。
私は憧れの翼さんと交わした初めての会話で嫌味を言ったという事になるのでは。
「……うわぁ、完璧イヤな子だと思われた」

溜息をつき、呼吸を改めて整える。
同時に、怪異殺しの剣の設計図を脳裏に起こす。
翼さんの戦闘スタイルについてはよく知らないけど、その機動力に私が付いていけないのは分かっている。
ここからは、援護射撃に努めよう。
シンフォギアに搭載された炭素転換を阻害するバリアフィールドの『おすそ分け』影響下に入った事で、ノイズの群れは誤作動を起こし、透明だった体は3色程のパステルカラーに変わっていた。
……このカラーリングだけで挑発されてるような気分になるのだから、不思議なものだ。
「やっぱ強いなぁ……翼さんは……」
インパクトの瞬間にノイズの存在を〝調律〟し、位相差障壁を無効とするシンフォギアの刃。
自身を中心に響く伴奏に合わせ、歌唱しながらノイズの群れに飛び込む翼さんは、私と違ってノイズの形などいちいち確認していない。
あの強さの前では粒のような蛙型も、耐久特化のずんぐりノイズも等しく風船のように弾けるのみだ。
凄いのはシンフォギアの性能か。
それとも、容易く乗りこなす技量か。
ノイズに有効となる限られた剣を宙に投影し、翼さんの立ち回りを援護するように次々と射出、撃ち抜いていく。
守るべき人がおらず、翼さんも到着した以上、私がやるべき事はもう残っていないけれど――――だけど、今日は最後まで付き合おうと決めていた。
……言い放った嫌味を誤魔化したいという下心もある。
でも一番は、歌いながら戦う翼さんを見てどうしても聞きたい事が出来たから。
「翼さんに戦ってほしくない……なんて、傲慢だよね……」
悲しみに囚われた歌と共に振るわれる剣。
その太刀筋からは、欠けるはずのない『勝利して生還する』という大前提が抜けていた。

―6―

いつも通りの作業の様な戦闘の終わり。

柄だけの状態に戻したアームドギアを収め、息を吐いて肩の力を抜く。

『ノイズの反応はあれで最後だ。お疲れ様だな、翼』

「はい、司令……ですが――――」

シンフォギアのヘッドセット部分に搭載された通信機能から伝わる叔父――――風鳴弦十郎の言葉に答えながら〝それ〟に視線を向ける。

黒い布の覆面で顔を隠した、謎の――――

「――――」

――――謎の……何だ。

現場の後片付けをする一課の職員達を興味深そうに眺める融合症例は、どこから出したのか赤いコートを羽織っており、頭の上にはボンボンの乗ったフワフワの帽子。

黒い布の覆面ではなく、ぐるぐる巻きのベージュのマフラーで顔を覆い尽くしている。

無害をアピールしているのか。

それとも私の理解を超えた高度なギャグだろうか。

……いや、彼女もその身を剣と鍛えた戦士であろうとする者だ。

――――体は剣で出来ている。ならば、剣にジョークセンスなど不要……!

そういう事なのだろう。

『……現場からは未だ融合症例の武装と思われる反応が見られる。翼、杞憂だとは思うが念の為だ。もう暫くギアは纏ったままにしておけ』

「はい」

融合症例――――おそらく、立花響。

奏の『ガングニール』との融合体であり、異なる〝方向性〟を持つアームドギアのような武装を自在に生成する能力を持つとされている少女。

放置できる存在では無い、無いのだが――――

常に顔を隠している彼女には、その身を明かす恍(とぼ)けようの無い証拠が存在しない。

迎撃不能の『螺旋の剣』がある以上は下手に刺激する訳にもいかず、彼女との接触は戦場(いくさば)での対話に限定されていたものの、言葉が返ってくる事は今日まで一度もありはしなかった。

近付けば必ず啜り泣く声が聞こえた。

こちらの声など届いていなかった。

1年前、初めて戦場(いくさば)で会った時もそうだった。

炭素の山を前にアスファルトに指を突き立てて膝を突き、ノイズの狩り尽くされたその廃墟の中心で声を上げて泣いていたのだ。

恐らく、親しい人が逝ったのだろう。

位置の特定が遅れ、全てが終わってから駆け付けた私に縋り付いて、言葉にならない声で責めるように喘ぎ声を漏らした後、双剣を現場に忘れたまま逃走した。

〝――――何時も通りですよ、翼さん〟

皮肉を言うとは予想外だったが、会話が成立したのは初めてだった。

「……笑っているのか」

視線の先では、口元を覆っていたマフラーを下ろして職員から受け取ったコーヒーを手に笑みをこぼす融合症例の姿がある。

2年前から1歩も前に進んでいない私とは違う。

戦いの辛さに涙しながら剣を振るう未熟な戦士はどこへやら、「ふへぇ」などというぬけた声まで聞こえてきた。

『……偵察機(ドローン)が素顔の撮影に成功した、必ずしも今日である必要は――――』

「いえ、大丈夫です……今日こそは連れて帰ります」
小さく深呼吸を済ませて、前へ。
視線に気付き、頭を覆う帽子とマフラーを消して向き直った『融合症例』は――――
「お疲れ様、怪我はない？」
「はっ……はい！　おかげさまで、その。翼さんも大丈夫そうで……よかったです」
「……ええ、お陰さまで」
――――『立花響』は資料で見た写真と同じ顔で。
その表情は悲しそうでもなければ、皮肉屋という雰囲気でもなく。
不気味な程に明るい少女がそこに居た。

ＥＰＩＳＯＤＥ８　恥知らずの武装本能

―１―

広大な公園のド真ん中、最後のノイズが炭に還ってから僅か1分。
目の前では『どこから湧いてきた』と表現したくなる程に迅速に現れた一課の職員さん達が、せっせと炭の山を片付けている。
一課の人達、私への警戒は多少あるようだけど……。
覆面を『黒い布』から『ベージュのマフラーにボンボン付きのニット帽』に替えたお陰か、それほど強く恐怖してる様子は見られない。
「凄かった、なぁ……」
あの後、残っていたノイズは『天羽々斬』のシンフォギア装者である翼さんの手で、あっという間に全滅してしまった。
翼さんの戦う所をじっくり見たのは初めてだったけれど、能力の差は予想以上のものだった。正直なところ、最高速度（トップスピード）の『天羽々斬』は目で追うどころか影さえ見えない。
私にもあの力があればもっと多くの人を助けられるんじゃないかと思ってしまう。
腰の外套の下に隠している赤い角柱のペンダントは、私が復元した『ガングニール』のシンフォギアだけど、〝核（コア）〟となる聖遺物の欠片はハリボテだし、コンバーター部分にだって抜けがある。
私にとって、これは会った事のない恩人の形見であり、魔術使いとしての上達の証。
ただ、心の支えとして持っているだけのものだ。
「――――、とと」
答えの出ない、実のない思考を切り上げて、背後の気配に向き直る。
近付いて来ていたのは、紙コップを手に微笑む（たぶん）二課職員のお姉さんだ。
「あの、あったかいものどうぞ」
「はぁ、あったかいものどうも……」
ふんわり立ち上るコーヒーのいい匂い。

小さく頭を下げて、職員さんから両手で包むようにそれを受け取った。
自然な笑顔、自然な呼吸。随分と落ち着いた振る舞いに少しだけ、呆気に取られてしまいそう。
どこまで私を知っているのか――――肝が座っているというよりも、なんだか信頼されているような感じがする。
――――まぁ、もう顔を隠す必要も無いかな。
顔を覆い隠していては飲めまい、と理由を付けて顔を覆い隠していたマフラーを下ろし、受け取った紙コップに口をつけた。
外套の〝護り〟のお陰で体温が奪われる事はないとはいえ、氷点下の戦いの後でこの温かさは有り難い。
「ふへぇ、あったまるゥ……」
……だから、思わずだらしない声が漏れるのも仕方ないのだ。
「ふふっ」
「あっ、……アハハ……」
笑われた恥ずかしさを、愛想笑いで覆い隠す。
一課の人達は警戒しているようだけれど、二課の職員さんっぽい人達の目線はどうも友好的だ。
実は、訳あって来月あたり二課にお邪魔するつもりだった。
正面から訪ねて行って受け入れられるか少し心配ではあったけれど、でも。この様子なら杞憂で済むだろう。
――――本当は切り札である固有結界が使えるようになるまで、二課とは無関係でいたかった。
ここぞという時までにどうにかモノにできればいいのだけど。

―2―

――――さて。
『二課が私を受け入れるか』というひとつの懸念は、無事に払拭されたんじゃないかと思う。あの様子なら、アレコレと不利な要求をのまされる事も無さそうだ。

不落の城にすら思えた二課のデータベースが、今はとても身近に感じられる……までは、よかったのだけど。
〝今日こそは連れて帰ります〟
……なんていう翼さんの呟きが、事後処理に指示を出しあう人達のざわめきを縫ってやってきた。
まるで名乗りを上げる武将のような、名状しがたい凄味の込もったその声が思考を止める。
確かに二課に行く用事はある。
でも、今から行くわけにはいかないのだ。
寝てる未来に何も言わずに出てきたのだから、あまり時間を掛けたくないというのもある。
だけど、それよりも。なによりも。彼らは私をシンフォギア（ガングニール）の破片との『融合症例』であると認識しているからだ。
この勘違い、これは可能な限りそのままにしておきたい。
ならば、私が隠し持っているハリボテのギアペンダントは隠し通さなければならないものだ。
見られれば私が融合症例であるという事に疑問を持たれかねないし、このまま二課本部に持ち込んだとして隠し通せるかは怪しいところ。
――――戦う翼さんを改めて見て、どうしても聞きたいことが出来てしまった。
どんな答えが返って来ても、私の取るべき行動は何も変わらない……そんな、どうでもいい筈の事が気になってしょうがなかった。
だから、ついカッとなって残っちゃったけど、何も今日である必要なんて無かったのだ。
聞きたいことなんて、来月二課にお邪魔してからいくらでも問えた筈なのに。
「……こういう暴走癖は直さないとなぁ」
何か思いつくとすぐに周りが見えなくなるのは、私の悪い癖だ。
翼さんの……お祖父ちゃん？　の元へ乗り込んでいった時といい、私の犯す過ちは、常に暴走から出ているといっても過言ではない。

……もしかして、私の元の起源って〝食卓〟みたいなものじゃあなくって〝暴走〟とかだったりするのだろうか。
「――――ふう、」
未来にしか見破れない程の完全な作り笑いで微笑んで、マフラーと帽子の投影を解除。
ちいさく咳払いをして、近付いて来た翼さんに体を向ける。
「お疲れ様、怪我はない？」
「はっ……はい！　おかげさまで、その。翼さんも大丈夫そうで……よかったです」
「……ええ、お陰さまで」
静かに微笑む翼さんの微笑みは、自分の演技が恥ずかしくなるぐらいに完璧だ。
この戦跡においても場違いにならず、それでいて緊張もさせない表情の塩梅。これが舞台に立つ人間なのかと感服する。
「あの〝花〟には助けられました。『アイアス』と言っていたようだけど……」
「はいっ、ギリシャ神話から取った名前なんです。伝説とか、好きで」
「英雄アイアースの用いた7枚皮の盾、ね。二課じゃ本物なんじゃないかって騒いでいるわ」
「あはは……」
――――本物です、なんて答えられるわけもなく。
予想以上にゴリゴリと探ってくる翼さんに、思わず口の端がヒクついた。
「……ああ、ごめんなさい。そうね、話は落ち着いてからにしましょうか」
「落ち着いてから、ですか」
「ええ――――」
そう言葉を切ると、翼さんはゆっくりと正対する。
告げられる言葉はやはり、
「――――立花響さん、自衛隊・特異災害対策機動部二課まで同行願います」

やはり、予想した通りの要請。
拒否権が無いのは、その声色からも明らかだ。
「えと。また来月あたり改めて……」
「認められません。貴女もそのつもりで残ったのでしょう」
そう言って、翼さんは脚の装甲から、棒……柄だけのアームドギアを取り出し、刃を生やしてひと振りの刀へと展開する。
眉をひそめ、こちらを見据えるその表情はどこか、懇願するようでもあり……。
「――――」
……心を決めた。
小さく息を吸って、視線は翼さんの背後へ。
それに釣られてか翼さんの意識も僅かに逸れる。
その瞬間、お腹の底から渾身の咆哮（シャウト）を解き放

「あ、あれはなんだッ!!」

――名演だった。
この場全ての心を鷲掴む会心の叫び。全員の視線を私と同じ、何もない夜空へとすり替える事に成功する。
同時に、全力で地面を蹴った。
弾けるようなスタートダッシュ、一瞬にしてこの場を離脱した――
――筈だった。
「っ――――!?」
認識を超えて眼前に滑り込む一刀。
秒にすら満たない刹那。背後に居た筈の翼さんに今、前から刀を突きつけられていた。
「……お前とは、友好的な関係を築きたい。これは、我々二課の総意でもある――――だからこそ、この1年と半年を待ったのだ」
力の篭もる、翼さんの声。
打って変わって真剣な表情で言葉を告げる。
「どうしてもという来れない理由があるなら言ってくれ、我々は最大

限譲歩しよう。お前の犯した窃盗、脅迫……風鳴宗家への襲撃も、全て不問とする事を確約する……！」
「私は……私、は……」
渦巻き、込み上げる自己嫌悪。軽い気持ちの行動で、こんな状況を招いた自分が嫌になる。
こんなにも真摯に私に向き合ってくる翼さんに、全てを明かせないのがどうしようもなく心苦しい。
「――――私は、」
羽織っていたコートを消して息を吐く。
唐突に膨れ上がった私の敵意に反応して、小さく身構える翼さん。
私達を取り囲んでいたサングラスの職員さん達とコーヒーを持ってきてくれたお姉さんも、口元に張り付けていた微笑みを吹き飛ばされ、怯えるように一歩引いた。
「私は、ちょっと聞きたい事があっただけで。長居するつもりは無かったんです」
「聞きたいこと……だと？」
別に、この問いは今である必要はないし。
話す機会だって、二課と合流してからならいくらでもある。
「……だって、戦うのは辛いでしょう」
本当はどうでもいい筈、あまりに無意味な問い掛けだ。
だって、どんな答えが返って来てもこれからの事は変わらない。翼さんと肩を並べ、力を合わせ、人類滅亡を手引するものに立ち向かう。
「……武器を持つのは、辛いでしょう」
だけど、どうしても気になってしまうから。
今、この場で。聞いてみたかった。
「それなのに――――翼さんは、どうして戦うんですか？」
何故そんな事を、と。
翼さんは意外そうに目を丸くすると、少しだけ考えるような素振りを見せ、答えを出した。
「……辛いなどと思う事はない、これが風鳴に生まれた私の使命だからだ。この身はもとより、己をひと振りの剣と鍛えた防人、剣に感情

など不要だろ　」
それを聞いて、身勝手な怒りが私の中で膨れ上がる。別に翼さんにって訳じゃない。ただ、どうしようもなく頭にきた。
導くべき親は、大人達は居なかったのだろうか。
知っているのだ。
こんな戦士達をよく知っている。衛宮士郎の記憶にある、ごくありふれた破滅の形
「そうですか……」
――――ともあれ、もう十分だ。
聞きたい事、聞いて欲しい事は山とあるし、未来のために翼さんのサイン色紙も持ち帰りたい。
だけど、それは剣を突き付けられたまま出来るような事でもないから、今日はここまで。あとは多少強引にでも帰らせてもらおう。
魔術回路をスタートさせ、干将・莫耶の設計図を脳裏に起こす。ちょっと荒っぽいけど、走って離脱できる程の機動力は無いのだから仕方ない。
……だから、八つ当たりなんかじゃあない。
そんな言い訳を心の中で呟いて、恥知らずの武装本能に火を点けた。

―3―

「そうですか……」
何が気に入らなかったのか。
悲しそうに目を細め、融合症例は大きく息をつく。
「気が変わりました、二課にお邪魔します」
「……そうか、では」
「これから唯一の装者を喪うんです、補充が必要でしょう」
――――今、なんと言ったのか。
聞き返す間も無く、融合症例の気配が殺気で満ちる。
決定的なまでに出遅れる。いつの間にか彼女の手に握られていた

漆黒の刃が、突き付けていたアームドギアを小さく跳ね上げた。
「くッ――――！」
迫る追撃の白亜。咄嗟に立て直した拙い体勢から刃を合わせ、眼前の一刀を叩き割る。
陶器の割れるような音と共に、宙に溶ける白い破片。無心にして無造作な刃のぶつかり合いは正に爆裂であり、互いの距離を一手にして押し広げた。
「何のつもりだッ――――!?」
「私、思ったんです。いずれグラム幾らの炭になって掃除機に吸われていくぐらいなら、ここで人として死ぬほうが有情なんじゃないかって」
――――剣戟が爆裂なら、吐き捨てる言葉もまた爆弾か。
天羽々斬のヘッドセットから司令室のざわめきが、撤退の進言と困惑の言葉の飛び交う様子が伝わってくる。
しかし――――、それを受け止めるこの身に慄きは無く、怒りが湧き上がることもまた、無かった。
私のアーティスト活動に於けるマネージャーを兼ねる緒川さんがこの場にいれば、きっと同じ感想を持った事だろう。
「だってそうでしょう。あんな死にたがりの剣で、いつまで生きられるかも分からない」
「……失礼な」
思わずして口を衝く買い言葉。だが、突如として不自然になった融合症例の声は、明らかに台本を読む者のそれだった。
例えるなら、あれは新人の声優。大人気となったテレビアニメの楽曲を歌うため、大御所の集う生放送に単身放り込まれてしまった新人声優だ。
慣れない事をしているからか、さっきまで自然だった彼女の表情が、今はどこかぎこちない。
「人に非ず、剣に非ず。何者にもなれない風鳴翼は、せめて人らしく死ぬべきだ」
理想的なリズムで投げ掛けられる強烈な、劇的な文句ではあるが、

やはりどこか演技くさい。
思うに今の彼女は噛まずに言い切る事で頭がいっぱいなのではないか……そう考えると案外、可愛いものだ。
「フ、だんだんお前という人間が分かってきたぞ――――、大根役者め」
「む、」
「皮肉屋を気取るには、些か迫力不足だな」
頬を朱に染めて口ごもる、融合症例。
――――つまり、彼女は私の事を案じているのだろう。あるいは、叱りたかったのかもしれない。
正直、何が言いたいのかは微妙に分からないし、余計なお世話でもある。
しかし……この少女とはきっと分かり合える、手を取り合えると強く確信できた。
「どうしても、大人しくついて来る気は無いという事か」
「あ、あまり遅くなると妻が心配するんです」
「……やはり、ジョークセンスは三流だな」
「ッ――――心外です……」
ぎり、と。剣を握りしめる融合症例の左手から音がする。眉間にシワを寄せ、射殺さんとばかりに迫る視線は戦意で満ちている。
現場に出ていた職員達も既に撤収を完了している。ならば、これ以上の問答はもはや無意味か。自分の刀（アームドギア）を構える手にも力が入る。
「いいだろう、ならば……続きはベッドで聞かせてもらうッ！」
冷えていく戦場（いくさば）の空気。
反発するように、胸の内に灯る熱。
やるべき事は定まった、容易い仕事だ。
白亜の剣を砕かれての一刀流。漆黒の刃に、赤い蜂の巣模様の小さな剣を左手に構える融合症例――――立花、響。
この、ヤケになった戦友を叩きのめして連れて帰ろう。
「いくぞ――――、ッ!?」
その一言を合図としたのか。

踏み込もうと力を込めた瞬間、地面に小さな陥没を作り、立花の姿が掻き消えた。
――――否、消えてなど居まい。
もとより立花は、私の間合いから離脱する程の機動力を有さない。
ならば、沈み込んだ先は私の盲点。それは認識外の角度に隠れてい

「そこかッ！」
直感のままに振るう一閃。
現れる、空振る剣の上を滑るように跳ぶ立花。
緩慢に振り下ろされる漆黒の刃を叩き払い、無防備な体に狙いを定め、回避不能の2連撃を叩き込んだ。
それで勝負は決まる――――筈だった。
「なッ!?」
僅かひと振りで明後日へと逸らされる連撃。その直後、反撃の脚が側頭部を刈りにくる。
気付くのは早かった。
回避するのは容易かった。
反射的に上体を引き、この一手をやり過ごす。
鼻先を掠めていく豪風の如き蹴脚。
この蹴りまでを凌がれれば『仕切り直し』だろうと括った高を即座に棄てて、次なる一手を準備する。事実、立花は流れるような動きで追撃の予備動作を終わらせていた。
回避してもなお心を打ち据える有効打、蹴り砕かれたのは慢心か。
そうして瞬く間に駆け抜けた十手の攻防、小手調べを制したのは立花だった。
振り上げられる白亜の刃。つい先程叩き割った白い剣はいつの間にか立花の右手にあり、回避不能の一刀となって私の元へと到達した。
「――――」
左肩に衝撃、同時にがくりと落ちる天羽々斬の出力。見逃されるように距離を取る。

シンフォギアに申し訳程度に備わった物理装甲、肩部の一部が打ち合いの末に、白の一閃に斬り落とされたのだ。
一刀のみで打ち合っていたのは再生成の余裕がないからではと思っていたが、どうやら此方の隙を引き出すための芝居だったらしい。
立花の顔を見れば、『してやったり』と書いてある。
その表情は見るものが見れば虚勢であると分かるようなものだが、それを見抜けるのは直に対峙する私だけのようだった。
『撤退だ、翼ッ！　今すぐその場を離脱しろッ！』
天羽々斬のヘッドセットから聞こえてくる命令は、まるで怒鳴り声だ。
流石、司令――――風鳴弦十郎だけは、偵察機（ドローン）のカメラ越しにでありながら、この少女の業前を見抜いたのだろう。
しかし、その指示には従えない。
「いいえ、司令。やらせて下さい」
『翼……！』
此方の通話を好機と見てか、立花が突進する。
応える声に、刀（アームドギア）を握る両手にも力が入る。
「全ての攻撃には致死性が無い。拙い殺気には、殺意が感じられませんッ……！」
再び二刀となって襲い来る立花、更に激しさを増す剣戟を迎え撃つ。
まるで、決戦に挑むような感覚がある。
……長かった、待つだけだった1年と半年が終わろうとしているのだ。此方にだって聞きたい事、聞いて欲しい事が山とある。
それに、ここで引き下がれば先程に盗み撮った証拠写真を使う事になりかねない。遂に素顔を晒すまでになった彼女の信頼を裏切って、その逆鱗を撫で上げる事になるとしてもだ。
強硬手段を先送る為の口実が失われた以上は、それが血税で生きる木っ端役人の限界という事。
「――――故に、何としてでもッ！」

何としてでも、ここでお前を連れ帰る。
加速する打ち合い。奏でられる伴奏に合わせて歌唱を始めると、下げられた天羽々斬の出力が少しづつ戻り始めた。
「っ……」
――それでも劣勢。
神速の認識を超え、殺到する漆黒と白亜。
立花の剣は緩慢極まる。だが、追い付けない。襲い来る刃の初動が全くもって掴めないのだ。
いつの間にか間合いが変わり、刃は迫る。
ゆっくりと、しかして確実に立花はシンフォギアとの性能差を埋めてきているかのようだった。
「ふッ――――！」
勢いを増す老練の如き剣術。
極限の剣戟に、紡ぐ歌すら途切れかける。
そも戦法の極意とは『型が無い』という事だ。立花響の剣技の型はまさにそれ、不定形に錯覚するほどに非常な手数の多さがある。
特別優れている点など無い。ただ、無限とすら思わせる程の戦闘論理。確かな心眼を備えているのだ。
「考えゴトですか、余裕ですねッ……！」
瞬間、苛立つような声と共に横一閃にと振り抜かれる白亜の刃。
しかし、非力な立花による強引な一刀は私に利するもの。互いの間合いは小さく開き、その代償として立花は勢いの余りに膝を突く。
逃し難い待ち続けた好機、刀（アームドギア）を峰打ちに持ち替えようと
「……は？」
――自分が無手である事に、気が付いた。
絡め取られたのか。さっきまでこの手にあった筈の刀が、無様に宙を舞っている。
「は――――あァッ――――！」
「ッ……！」
体勢を立て直した立花が斬りかかる。
なり振り構わぬ後退、間一髪で敗北を免れた。

最早、『容易い仕事』などではない。
……認めよう、立花響は間違いなく難敵だと。
その風態に似合わぬ熟練した剣の閃きは、まるで伝説の時代から蘇った剣豪の如く鉄壁だ。
同じ二刀で応戦すればという訳にもいかない。
二刀流の訓練を積んでいない訳ではないが、にわか仕込みの双剣術では、対策としては逆効果になりかねない。
なれど、重さ・速さも此方が遥かに勝っているのだ。
如何に立花の心眼が冴え渡ろうと、この圧倒的差を覆す程のものなどあるのだろうか。
「……ああ、そうか」
そう、前提がまず間違っていた。
私の失策は立花に技のみの勝負を挑んだ事。
無意識のうちに彼女に先攻を譲り、誘導されるがまま、用意された〝正解〟をただなぞるように剣を振るっていた事だ。
それこそが、私に与えられた反則級の特権を殺していた。
攻めるのは常に此方で無くてはならなかった。
立花に追いすがるのではなく、独走するように振り切る事で戦場を支配する。天羽々斬の神速によって立花の戦闘論理を引き崩すのだ。
――――ならば、勝機はある。
これは、間違いなく勝てる相手だ。

ＥＰＩＳＯＤＥ９　蒼き流星サキモライザー

―１―

次なる刀（アームドギア）を展開し、深く息を吐く。

数秒にわたる長い休憩時間の末、今度はこちらから立花に向けて進した。

「速いッ……!?」

此方の体勢を崩さんとする柔の剣を、剛の剣にて打ち払う。

渾身を込めて振るう剣は全てが必殺となり、受ける立花から余裕の表情をかき消した。

考えるのはただ、攻める事。『どう凌ぐか』を思考の隅に追いやって、ただ目の前の敵に効果的な剣筋だけを探り、放ち続けるのだ。

しかし、重さ・速さこそ私の優位性だが、さりとて技術を軽視しても良いなどという法は無い。

むしろ逆。この攻勢により此方に余裕が生まれ、逆に立花の余裕が失われた現状、私達の技術は遂に拮抗し始める。

――より速く、より意外に。

今まで積み重ねてきた修練の成果が、〝直感〟という形で私に道を示してくれる。

視線をずらし、ミスを誘う。

呼吸のリズムを敢えてズラし、騙す。

眉の動きに、肩の高さ。指先の、軸足の筋肉の力み方。そんなものがフェイントとしてまかり通る非常な打ち合いにこの瞬間、確かに自分は適応していた。

「っ――――」

殺した筈の感情が高揚する。

それが剣筋を鈍らせたのか、立花の振るう剣に意表を突かれて僅かに体勢を崩してしまう。

それはこの場においてあまりに大きな隙であり、そこから僅か数手の打ち合いで、戦況は瞬く間に私の不利へと傾いた。

このまま張り合うのでは先程までの防戦の焼き直しでしかない、それは下策だ。
「ならばッ……！」
攻勢に転じようとした立花の一瞬の隙を突き、即座に後退。勢いのままに跳ねるように跳躍。
歌唱しながら大きく両手を広げ、音楽のエネルギー『フォニックゲイン』を周囲に放出。空間に無数の小剣（アームドギア）を生成する。
地上から見上げる立花と、睨み合う。
無数の剣群は、それこそ流星群のように。
狙いも付けずに放たれた千の刃は、落ちるよりも速く立花の周囲に降り注
【千ノ落涙】
「投影（トレース）、開始（オン）――――」
逃げ場は無い、全てを剣で払うなど不可能。
そんな天より喰らい付かんとする千の刃に対して、立花は双剣を手放し、新たな武装の生成を以って対抗した。
迎え討つはまるで鏡面、複製された無数のアームドギアが、落つる落涙を相殺する。
【是、千ノ落涙】
――――だが、それでいい。
両手を広げて此方を見据える立花はどうやら動けない様子でもある。予定とは違えど、釘付けにさえ出来れば十分だ。
先んじて自由になった体で3本の短剣を投擲。届かず、弾かれた短刀の1本が、その影へと突き刺さった……！
【影縫い】
ぴくりと、僅かに震えて立花が動きを止める。
これこそは、練り上げた氣を以って対象の影を地に縫い止め、動きを封ずる〝忍術〟だ。
私がこんな対人戦技を備えている事は流石に予想外だったのか、立花は意外なほどあっさりと術にかかる。
「取った――――！」

刃を返し、影縫いの〝余り〟をアームドギアに注ぎ込む。あとは、この忍術としての『峰打ち』で意識を奪えば決着する。

……そう確信する私に呆れるかのように、立花は顔をしかめ、動かない筈の体を捻ってこの一刀を掻い潜ってみせた。

「考えが甘いッ！」

「なッ――――」

大砲の様な衝撃が腹を刺す。

なす術なく蹴り飛ばされた体は、勢いよく茂みの中を転がった。

慌てて立ち上がり追撃に備えるが、既に立花の姿はない。

あれ程までに強烈だった存在感は消え去り、公園は本来の静けさに包まれていた。

そう、立花にとっての勝利条件とはこの場からの離脱。これだけ大きな隙を見せれば、姿を隠すのは必然だったのだ。

「――――」

深夜である事を思い出させる静寂の中。

耳に届く小さな音は、風が葉を揺らす音、虫の羽音、駆ける小動物の……妙な音。

小さな違和感の元に背を向けたまま刀（アームドギア）を傾かせ、鏡のように光を反射する刃の側面に背後を映して様子を伺う――――ほんの一瞬、木々の間をすり抜ける赤い風を目撃した。

「そこかッ！」

弾けるように反転し、刀（アームドギア）を一閃。

水平に斬撃を飛ばせば、放たれたフォニックゲインの刃は土煙を上げながら猛進し、立花の投げ放ったふたつの剣と相打った。

【蒼ノ一閃】

再び、立花と視線が合う。

焦るような目つき。あれは演技か、それとも本当に私が押しているのか――――後者だろう。

あれは間違いなく素の感情だ。

「投影（ブレイド）、開始（オプ）――――！」

目算４０メートル。

勢いよく距離を詰める私に、立花は弓を生成し後退しながら射撃する。
矢と呼ぶべきか、正確に剣と表現すべきか。
刀（アームドギア）にて迎え撃ったその魔弾は予想よりも遥かに重く、前進しながらの迎撃を封じる。ここに正攻法での勝機は無いものだと理解した。
――――ならばどうする？
明瞭だ、正道で成らぬのならば邪道がある。
1射目を凌ぎ、迫る2射目。
剣で払うのは難しい軌道。
故に、初弾を払った勢いのままに体を捻って掻い潜る。体勢は致命的なまでに傾き、立花の照準が偽りの王手をかける。
放たれた3射目、逃げ道を塞がんと飛来したそれは予想通り、期待通りの一矢。
誘い水にまんまと掛かり、私に勝機を持ってきた。
天羽々斬の脚部スラスターをごく低出力で点火する。強引に体制を立て直しながら刃を返す。
眼前に迫る致命の矢、持てる力の全てを以って峰打ちを合わせ、野球のように打ち返
「はッ――――！」
「うそぉっ!?」
かくして私の足を止めてくれた重撃は見事に寝返って立花に喰らい付き、特大の隙を引き出した。
限界を迎えたアームドギアを投げ捨てて、脚部装甲から次の刀（アームドギア）を抜き放つ。
全速力で間合いを詰める。
残り20メートルを切り、再び完成する剣の間合い。一切の減速をせずに刀（アームドギア）を振り抜けた。
「投影（トレース）、開始（オン）――――！」
再び立花の手元に現れる、白と黒の双剣。
交差する一瞬、視界の端。勢いを殺しきれずにたたらを踏む立花の姿をその目に認めた。

体を捻りながら側転し、地面に蹴りを突き刺して急停止。即座に反転して立花に視線を戻す。
すれ違い、開いた距離は１０メートルほど。これを詰めるのには私でも２歩かかる。
単純すぎる一手は悪手だったか。
体勢を整えるのは立花の方が早く、私が踏み出そうとする頃には、既
「――――鶴翼（しんぎ）、欠落ヲ不ラズ（むけつにしてばんじゃく）」
既に、漆黒と白亜の刃を投げ放っていた。
殺到する二刀は左右から、弧を描き飛来する。
「決め台詞とは……お前こそ、余裕か 」
左右から同時に襲い来る刃を同時に逸らすという難題と、決め台詞のような呪文に煽られ強張る体。
迎え撃つ剣にも過剰に力を乗せてしまう。
「なッ……」
しかし、それがかえって奏功（そうこう）したか。
投擲された二刀には意外なまでの重さがあり、込めすぎた力で振るった迎撃の一刀は偶然にも丁度良く、その軌道をずらすに留まった。
「凍結（フリーズ）、解除（アウト）」
「同じ武器……!?」
立花の方から突進する。
その手に握られているのは、投げ放たれたものと変わらぬ双剣だ。
――――無駄なことを。
先の投擲はただ投擲しただけの一手。事態に一切の動きをもたらさない、あまりにも意味のない投擲だった。
何の意味もない、無駄な一手を打ってしまう。
それ程までに私は立花を追い詰めたのか？
あり得ない。
彼女にそんな隙などあるものか。
ここに来て突如、立花の絶技が途絶える。そこに意味が無いなどあ

り得ない。
無意味な一手だったというのならば、次の一手でその〝意味〟は現れる。
「同じ、武器ッ……！」
そう、あの双剣は去年に一度、二課によって回収された事がある。
回収後しばらくして消滅してしまったが、櫻井女史の言では『互いに引き合う』という性質を秘めていたという事が判明していたのだ。
刀（アームドギア）を傾ける。
鏡面となっている側面には、先に弾いた二刀が軌道を変え、再び飛来する様子が映っていた。
――――戻ってくる刃の軌道までもが器用に急所を避けているようにも見えるあたり、大した業前だと関心する。
「――――心技（ちから）、泰山（やま）ニ至（を）リ（ぬき）」
振り下ろされる白亜の刃に剣を合わせる。同時に背後から飛来した漆黒の刃には、展開した脚部ブレードを盾にして誤魔化すようにやり過ごす。
分かりきった奇襲でこそあるものの、その重さは鉄塊をも打ち砕く程のもの。技もなくそれを受け止めた脚部ブレードは、只の一撃で砕け散った。
「ぐぅッ――――！」
力を込めた躰に疾る、鋭い痛み。
砕けた刃の破片か、あるいは凌ぎきれなかった斬撃によるものか。私の体には、いつのまにか赤い線が刻まれていた。
そして、焼き直しの一手を受けてしまう。
間髪入れずに襲い来る薙ぎ払いの漆黒と、再び背後より迫る奇襲の刃。
使い捨てるように盾としたもう片方の脚部ブレードも当然の如く砕け散り、遂には刀（アームドギア）を握る手からも衝撃のあまりに力が抜ける。
――――戦場（いくさば）が凍りつく。
立花の猛攻、二度もの奇襲を凌ぎ切った事で今、私は完全にバランスを崩してしまっていた。

私の剣はここで手詰まり。
今から剣の握りを正し、崩した体勢を立て直すまでの1秒間。私はこのまま無防備を晒すしか許されない。
だが、立花の手にだけは次の一手が用意されてい
「――――心技（つるぎ）、黄河（みずを）ヲ渡（わかつ）ル！」
私の意識を刈り取らんと狙いを定める、立花の剣の柄（つか）。
ここに勝敗は決した。この柄殴りは凌げないものではない、しかし、凌ぎきれるものでもないのだと確かに理解していた。
【鶴翼三連】
ならば夢中になるあまり、凌ぎきる事を決めた時点で、私は彼女に敗北したのだろうか。
振り絞った全力で身体をひねった。
昇る旋風の双刃、足先にぶら下がった脚部ブレードの残骸を叩きつ

「あ――――？」
――――驚きはどちらのものか。
走馬灯めいて減速する刹那。最後っ屁と放った脚部ブレードの残骸が、ゆっくりと彼女の中に潜り込んでいく。
「ッッ――――！」
必死の形相で急所から攻撃を逸らす、立花響。
……錯覚していた。
シンフォギアでしか対抗できないはずのノイズに立ち向かえる謎の戦姫。
奏のガングニールとの融合体である彼女に、何時の間にか私は……奏の姿を重ねていたらしい。
彼女が血を流す場面を何度も目にした筈なのに、あるはずのないシンフォギア固有の各種防御フィールドを錯視していた。
「しまっ――――」
知らず、声を零していた。
彼女は避けられない。
何故なら、これを凌ぐには私を斬り分けるほか無いからだ。

コマ送りのような緩慢な時間。
弾ける火花、宙に咲く鮮血。金属をこすり合わせたかのような異音が響く。
シンフォギアであれば浅い切り傷で済むような斬撃、天羽々斬の脚部ブレードは――――当然のように、彼女の小さな躰（からだ）を引き裂いた。

―2―

――――鮮血が舞う。
腰から肩に、斜めに疾る稲妻のような斬撃。
込み上げる激痛を覆い隠すように響く、まるで金属を擦るような不気味な音。
血と火花を撒き散らしながら、長い小競り合いに幕が下りた。
「か――――は、ァ――――ッ！」
たたらを踏み、後退する。
それは今までのような戦略によるものではなく、ただ命を保つ為のものだった。
「強い、ですね……翼さん」
「た――――立花ッ!? すまな……いや、直ぐに治療をッ……！」
大慌てで近付こうとする翼さんに、干将を突き付けて制止する。
物凄く痛いだけで、私に問題はない。
別に『腸がポロリ』なんて事にもなってはいないし、全力回避の甲斐あって刃は重要な器官を避けて通っていた。
しかし、
「た、立花……！ それだけの傷ッ、一刻も早く適切な処置をしなければ――――私を信じてくれッ！」
しかし、翼さんにはそうは見えないようで。
目の前の翼さんは、なんだか笑ってしまいそうな慌てっぷりだ。
でも、それも仕方ない。なにせ人体というものはとにかく脆いのだから。
通常ならこれほどの傷を受ければ、仮にショック死を免れたとして

も数分と持たないのが常識だろう。
警戒を解こうとしたのか。翼さんは当然のようにシンフォギアを解除して、肩で息をする私に向けて手を差し伸べた。
「――――それじゃあ」
「え、ええ！　それじゃあッ」
――――丸腰になって近寄ってきた翼さんの胴に、慎重に拳を突き立てる。
これで決着。力を失い崩れ落ちる翼さんの体を受け止め、ゆっくりと芝の上に横たわらせた。
「……私の勝ちですね、翼さん」

―3―

「ふう――――」
公園からヨタヨタと歩くこと数分。
どこにでもあるような住宅街の中で、塀にもたれかかるように腰を下ろした。
人様の家に血痕を残すようなコトはしない、既に流血は止まっている。
左肩に受け継いだ魔術刻印が自動で行うささやかな治癒と、重ねて行う手動による修復。無残に引き裂かれた躰はみるみるうちに直っていく。
自身の修復なら出来ないこともない。
ライブ会場の惨劇のあと、目覚めた手術室でやった事と同じ。
鉄の刃で傷を縫い合わせて、それを肉に戻すだけ。左肩の魔術刻印による治癒もこの手順を踏んで行われている。
「翼さん、強かったなぁ」
小さな意地悪がしたくて勝利宣言なんてしちゃったけれど、あれは私の完敗だった。
そして、思い知った。
これからの戦いには、彼女という戦力が必要なのだと。

衛宮士郎の記憶から、数えきれない数の悲劇を観た。ノイズから人の命を守る中、いくつもの悲劇を視た。
遅れてたどり着いた狩場では既に亡骸が山を作り、間に合っても目の前で次々と炭にされていく。
そんな絶望をいくつもこの目で見てきたのだ。
だから、ひとりでも多く助けると決めたのに。
シンフォギア装者という特大の戦力を認めていながら、翼さんに戦ってほしくないなどと寝言を吐く。
我ながら呆れたダブルスタンダードだ。
「ダメだな、私……」
ああしたい、でもこうしなくてはと。考えを巡らせても、堂々巡りになるばかりで進まない。
……答えが出ないのなら無理に急ぐコトもないだろうか。まずは、知ることから始めるべきなのかもしれない。
思えば翼さんの事はテレビ越しにしか知らないのだ。それなのに彼女の在り方を否定するなど烏滸がましいとは思わないか。
翼さんの歌も、素の表情も。普段テレビ番組で見せている姿からは考えられないものだったのだから。
考えがまとまらない時は一晩ぐらい開けた方がいいのだと、いつだったか未来も言っていた。
そう、思考が一区切りを迎えた
【影縫い】
――――乾いた銃声と共に、月明かりが生んだ私の影に1発の弾丸が突き刺さった。
それは翼さんも使った、技。
衛宮士郎の世界にあった、低位のルーン魔術のようなもの。早い話が一工程（シングルアクション）に相当する魔術行使だ。
当然、私にこんなものは効かない。
この弾丸を撃ち込んだ男の気配が緩まないあたり、あちらもそれほど効果を期待している訳ではないのだろう。
……弾丸、余ってるのかな。

「――――出血は、止まっているようですね」
拳銃片手に、優しげな声で私に歩み寄る黒いスーツの男。
この人は、二課情報部のエージェントであり、翼さんの芸能活動におけるマネージャーも兼ねる……緒川ナントカさんだ。
「……はい、もう塞がりました」
「ですが、何かあるといけません。どうか二課本部にてメディカルチェックを受けていただけませんか？」
「私は大丈夫です、後に残るようなものはありませんから」
優しく諭すような説得。
清廉な人物なのだろう、その言葉も本心から私の身を案じてのものと感じられる。
「――――来月、リディアンに入学したら、二課にお邪魔しますね……緒川さん？」
だから、迷う事なくこの台詞を口にできた。
「ッ――――ええ。お待ちしています……響さん」
そう返すと、緒川さんは軽く頭を下げて去って行く。
取り出した通信機で何か話しているようだけど、私の事を報告しているのだろうか。微かにアラートがどうとか話す言葉が聞こえてきた。
「……うん、やる気出てきたかも」
ともかく、来月だ。
来月、二課に足を踏み入れると決めた。
そしてそれを二課の側にも伝えられた事は、僥倖だったと言えるだろう。
この意思を伝えた以上、二課内部の内通者はこの1ヶ月を使って『見られたくないもの』を隠そうとするかもしれない。
証拠隠滅を誘う悪手のようでもあるが、しかし、そうして開けられた空白はとても目立つのだ。
ほぼノーヒントの現状では、これは大きな近道となる。
『急がば回れ』という古くからの格言は、努めて忘れる事としよう。

―4―

そして、ゆっくりと立ち上がり、ぽてぽてと歩き出す。
意味もなく手を握ったり開いたり。意識を内界に向けて、自分自身を確かめる。
今日はかなり多くの魔力を使った。
螺旋剣の投影に加え、それほど多くの魔力は込めていなかったとはいえアイアスを完全に展開した。
それに、防具と外套の対物理・対魔力を維持するだけでも魔力は減るのだ。
家を出た時の魔力量を大雑把に数値化して……そう、仮に3，000とするならば、翼さんと合流した時点で残りは既に2，000ほど。
その後の小競り合いで更に減って今は1，500前後といったところだ。
使ったのは実に5割。私の場合、この容量を満たすのに早くとも丸1日はかかるだろう。
髪を伸ばせば、もう少しは余裕が出来るんだろうけど――――それは、日常への侵食だ。
髪型も、服装も、化粧品も。
私の全部は、未来の為に考えて決めている、それを戦いの為に変えるなんて絶対にイヤだ。
私が戦うことに未来はいい顔をしないのだから、戦いと日常はキッチリと分けておきたい。
「さて――――」
ふう、と息を吐いて全身に力を込める。
塞がりたての傷を労わりながら、〝日常〟の待つ小日向家に向けて少しづつ足を速めていく。
――――未来のことが気にかかる。
使い魔（ドローン）の視界を覗いて小日向家を見てみると、部屋には明かりが点いていた。
隣で寝ていた私が居なくなった違和感に目を覚ましたのだろうか。

もしかしたらノイズのニュースを見て、帰りの遅さから不安に囚われているかもしれない。
そんな逸(はや)る気持ちに急かされて、いつの間にか行きの全力にも近い速度で深夜の町を駆けていた。

「……いたた」
傷が開いた。
やっぱり、ゆっくり走ろう。
痕なんて残したら未来へのフォローが大変だ。

ＥＰＩＳＯＤＥ１０　ベッドの上では乱れりゃいい

―１―

「ア゛～、……」

――――寝起き１０秒。

女子力の目覚めは間に合わず、乙女の身に許されざる唸り声が暗い寝室に放たれる。

なんだか随分とおかしな夢を視た。

やたら高い目線で街を見下ろして、人々の日常を蹂躙する……欲求不満なのだろうか。

なんだか甘えたい気持ちになるけれど、こんな時に限って隣で寝ていた響は居ない。

「うぅ……」

不気味な夢をみたせいか、体中が違和感だらけで気持ち悪い。

意味不明の悪夢に限って――――やたらと現実感があったりするから困ったものだ。

寝起きの頭でものを考えるのは億劫だ。

頭を振ってモヤモヤした思考を払い落とし、ゆっくりと体で掛け布団を押しのける。

体を撫でる冷たい空気に、思わず左手の指輪を撫でていた手をずらして肩を抱いた。

「さむ……昨日は裸で寝たんだっけ」

暖房は動いている。

しかし、この３月上旬という時期に全裸で過ごすには、おやすみモードに設定されたエアコンはあまりに無力だった。

いよいしょー、なんて言って名残惜しいベッドから脱出して箪笥の前へ。少しだけ目移りしながらも、自分の下着と部屋着を引っ張り出した。

着替えるうちに、だんだんと目が冴える。

響から貰ったリボンで髪を纏め、携帯端末を部屋着のポケットに

突っ込んで、部屋を出て1階へ。
居間を素通りして、目的地のキッチンに到着するなり冷蔵庫の中を覗き込む。
カットされた苺も目を引くけれど、昨日のあまり（ペルセウスのおひたしと無双たっぷりシチュー）に隠れて、奥に見える茹でた菜の花の束がとても気になる。
明日のお弁当かな？　おひたしもいいけど……私は去年食べたサンドイッチが忘れられない。
カリカリのベーコンと良く合って、あれはとても美味しかった。
……ちなみに、『ペルセウス』も『無双』も野菜の名前だ。
献立を書いた紙を冷蔵庫に張るようになってから、響は時々おかしな名前の野菜を使う。
「塩昆布、梅干し～♪　紫蘇（シソ）、三つ葉～♪」
確認するのは簡単なお夜食の用意。
紫蘇は私、三つ葉は響。三つ葉の残りが少なくなっているみたい。
「っと、紫蘇はもう刻んであるし……ご飯は残ってたかな」
響の不在がノイズ狩りによるものであるならば、響は泣きながら、それでもお腹を空かせて帰ってくるだろう。
ふたりきりで何か食べながら、夜明けまで穏やかな時間を堪能したい。
お夜食の材料が揃っている事を確認したら、今度はお風呂の追い焚きをＯＮにして部屋に戻る。
寝るな、寝るなと自身に言い聞かせながら、欠伸をしつつちゃぶ台（ローテーブル）の前に腰を下ろした。
携帯端末を取り出し、繋げたイヤホンを耳に。
翼さんの楽曲を流しながらＳＮＳを開いてノイズに関連する話題を漁る。
やはり、ノイズの出現があったらしい。
今回現れた場所は大きな公園、深夜という事もあって犠牲者は無いそうだ。これなら響も、もしかすると泣かずに帰ってくるだろうか。
心の底から嬉しい気持ちが込み上げてくる。

――――だけど、それは直ぐに萎えてしまった。
ノイズの話題を見れば、嫌でも目に入る〝覆面〟の話題。
最近は覆面の少女の――――つまり、響の被害者などという連中が現れた。
逃げる人達を轢き殺そうとしていた暴走車を響が吹き飛ばした現場が偶然撮影され、その映像がマスコミに拾われたのが発端らしい。
嘘ばっかりの根拠を並べて、好き勝手に『覆面の少女』の是非を論じる。
世論は圧倒的に〝是〟に寄ってはいるものの、肯定的な発言だって不快なものが殆どだ。
死に物狂いで人の為、自分を削る少女をさして、へそ出しルックが魅惑的とは何事か。
そのおなかを愛でていいのは私だけだ。
……どうしてだろう。
こんな戯言、いつも見ているものなのに、なんだか無性にイライラする。
「はぁ……」
本当は響に戦って欲しくない。
こんな人達の為に響が自分を切り売りしているのだと思うと、とても嫌な気持ちになる。
でも、響を戦いから遠ざける事は簡単だ。
彼女は、私の為なら誰も彼もを見捨てられると誓ってくれたのだから。
『誰かの為に戦わないで』と、そうお願いするだけで響の戦いは終わりを告げる。私の為だけに生きてくれるようになるだろう。
響が、私だけのモノになる。
それはとても魅力的なことだけど、同時に絶対に出来ないこと。
ノイズの襲撃と共に、後輩のひとりが行方知れずになった時の響の顔。あんな表情を見てしまっては、とてもダメとは言い出せない。
「……私も響の隣で戦えたらな」
――――そして、私の思考はいつもの無い物ねだりを始めてしま

う。
響と同じ力をもって、響の隣、肩を並べ、まるでひとつの生き物のように共に戦場を駆け抜ける。そんな自分になりたくて。
「むん！　――――追想（トレース）、開始（オン）！」
……なんて言ってみたりする。
八節を追想（トレース）する、なんだかやれば出来そうな気もするけれど――――言葉遊びでどうこう出来たら苦労は無いか。
残念ながら、魔力のマの字も感じない。
「まあ、家を守るのが妻の役目よね」
――――人助けの果てには何もない。
放っておいたら、いずれ響は何もかもを放り出して空っぽになってしまうだろう。
だから戦えない私は、響の隙間を無尽の愛で埋めるのだ。
ノイズの発生時刻を確認して、今の時刻と見比べる。
今日はやけに帰りが遅い。
アレコレと考えを巡らせる度、不安が募る。
さっきから……私が響を待っているこの時間に、妙な既視感のようなものを感じている。
イヤホンから聞こえる歌声が何故か忌々しい。
腕は無意識のうちに服の内側で、ありもしない傷を労わるかのように身体を撫でていた。
再生中の曲を止め、溜息を漏らす。
早く顔が見たい、声を聴きたい、太陽の様なキミに私の不安を焼き払ってほしい。
早く帰ってこないかな――――

―2―

塞がりたての傷を労わりながら、走ることしばらく。夜明け前の……今は、4時ちょっと前くらいだろうか。
ようやく見慣れた町並みが視界に広がった。

日常への帰還という実感に、張り詰めていた精神が緩んでいく。
鋭くなっていた感覚は鈍くなり、曖昧だった痛みと疲れは、その存在を強く主張し始める。
そして、次の角を曲がれば小日向家といったところで、ふと足を止めた。
「歌……？」
聞こえてきたのは、優しげな歌声。
最も暗く、最も静かなこの時間帯に相応しい、オルゴールのような静かな歌だ。
「……未来（みく）」
はやる気持ちに背中を押され、小走りで駆け付ける。
玄関の前、塀に寄りかかって静かに歌う未来の姿はとても綺麗で。
少しだけ、声をかけることを躊躇った。
「あ――――おかえり、響っ！」
私に気付いて嬉しそうに駆け寄ってくる未来を抱きとめて、抱きしめて。猫のように頬擦りをしながら互いの存在を確かめ合う。
遅い帰りに、少し心配させてしまっただろうか。なんだか普段よりも積極的な未来にドキドキする。
「ただいま、未来――――」
詫びるように帰宅を告げながら体を離すも、そこにあったのはイタズラな笑み。
心底幸せそうなその表情に怯んだ隙に、未来の手が私の頬をぺたりと挟
「わぷっ――――」
私達は数時間ぶりに、キスを始めた。
それは『おかえりなさいのチュウ』というにはあまりに情熱的で、まるで貪られているかのようだった。
重ねられて、絡められて、吸い上げられて。
優しさが私を追い詰めてくるような、不思議な感覚がこみ上げてくる。
「ん――――んぅっ――――！」

五感を侵さんとナカを満たす未来の匂い。
徐々に、未来こそが世界の全てになっていくような錯覚。
あまりに大きく近い未来の存在はまるで熱湯のように、凍り付いた私の心を溶かしていく。
やがて腰を抜かしてへたりこむと、未来は覆い被さるように私の頭を包み込み、妖しく微笑みながら口付けを再開する。
曖昧な視界の先に見えた未来の姿は、捕食者のようでもあった。
「ふぁ……はむ――――んんっ――――」
吐息を交換するような官能的な体験。
逃す場所の無い快楽に心を蹂躙されること数分、息苦しくなってきたあたりで漸く私は解放された。
「ぷぁ――――満足っ」
「うぅ……みくの、ばか」
なんてことをしてくれたのだろう。
この地域の防犯カメラの映像を二課が確認していないとも限らないのに。
不意打ちを受けた体は完全に脱力し、立ち上がる事すら出来ずに未来の顔を下から睨む。
「ふふ、寂しかったの。――――お腹、大丈夫？」
「大丈夫、このとーり」
打って変わって心配そうな表情で様子を伺う未来に、呆れながらも返答を返す。
その両の眼は、うっすらと緑色に輝いていた。
「もう塞がったから」
「むぅ……」
キラーンと両眼が緑に光ると、自身に〝追想〟という結果を起こさせる未来の超能力。
未来自身しか対象にできない、起源を具現化させる〝魔眼〟は、いつからか私の魔力を得るだけで夢に見ずとも私の記憶を追想、覗き見れるようになっていた。
――――この能力が未来自身にしか効果を発揮しない理由も、今で

はなんとなく察しがついている。
後で、私に対しては使えそうでも試さないように言っておこう。
〝剣〟なんて起源を具現化されたら固有結界が暴走しかねない。
そしたら私は千の刃で串刺しだ。
「響、どうかした？」
「……未来って串刺しプレイとか、好きかな？」
「くし？　よくわかんないけど、響が串刺しになるのは許さないよ」
未来は眉をひそめてそう答えると、腰を抜かしたままの私を抱え上げて、家の中へと引き返した。
片手で門を開けて、ドアを開けて、少し暖かい屋内が私達を出迎える。
「お風呂にする？　お夜食にする？」
「未来にするぅ～」
「それは、あと」
「いけず」
ピシャリと切って捨てられる、『仕返ししてやるぞ』なんていう私の戯言。
聞いておきながら、まるで予め決めておいたとばかりに浴室に直行する未来の足取りに、漸くその意図に思い当たった。
「んー、先にシャワー浴びたいかな」
今日のお夜食はなんだろう。
お風呂上がりが、なんだか少し楽しみだ。

―3―

血やら汗やら、炭素やら……いろいろなものをシャワーで流して、小さい湯船をふたりで堪能した後。
未来の部屋のちゃぶ台（ローテーブル）で、シンプルなお茶漬けを啜りながらゆったりと話に花を咲かせる。
「うへ～、あったかい」
交わした会話は取り留めのない話で。

数日後のホワイトデーに一緒に作るお菓子の事や、茹でておいた菜の花をどう調理するか、なんてもの。
未来の希望を聞き入れつつも、新しいおいしさとの出合いを提供すべく考えを巡らせるのは、私の日々の楽しみのひとつだ。
そんなこんなでお茶漬けを食べ終わって、ちょうど話題が尽きた頃。
本題とばかりに未来が質問を投げかけた。
「それで、翼さんどうだった？」
「強かった、負けちゃったよ」
未来が〝眼〟で視たものを補足するように、私の言葉であの一戦を振り返る。
私が思っていた以上にシンフォギアの性能が高かった事、翼さんの剣技の巧さや、大きな伸び代の事。
敵に回らないと確信できたからか、思わず「あれには勝てない」とも言ってしまった。
あの剣戟は『相手を傷付けず無力化する』という技術勝負だったからこそ、なんとか対応できただけのことなのだし。
「それなら翼さんの反則負けじゃない」
「あはは……」
だけど、未来は納得がいかない様子。
静かな怒りと悔しさを、シワという形で眉間に集めて小さく唸っていた。
「ガングニールが使えたら響の圧勝だったかな？」
「どうかな……修復したといっても所々ハリボテだし、仮に使えても肝心なところで動かなくなっちゃうかも」
でも、私も装者になってみたいとは思う。
シンフォギアの圧倒的な力があれば、モリモリ人の命を守れるに違いない。ひとつぐらい余ってないのかな、シンフォギア。
――例えば『イチイバル』とか。
日本政府の把握していないシンフォギアはあるだろう。最悪、シンフォギアの製法が世界中に拡散している可能性……は、無いと信じた

いけど。
「翼さんってさ、友達いないと思うんだよね」
「それが今日、残った理由？」
「うん……家族とも縁遠いみたいだし、なんというか戦う動機が胡散臭いというか」
どうも、導くべき親や大人に、翼さんは〝人〟ではなく〝剣〟として育てられたらしい。
だけどそれは『戦いに身を投じる』という〝選択〟をしていないという事なんじゃないかとも思えてしまう。
「翼さんが戦うのは、それ以外の生き方を知らないからなんじゃないのかなって」
「響だって大して変わらないでしょ」
「それは、そうなんだけど……」
武器を持つのは『イヤな事』なんだから。
だから、私が――――私だけが剣を取ればいい。
私は、そんな風に考えてしまうのだ。
傲慢だと分かっている。『誰も傷つかない世界』なんて、あり得ない望みだけど。
この素敵な理想に少しでも近付きたいと、どうしても焦がれ、焦ってしまう。
その結果が、今夜の失態だ。
「それとね……意外と好感触でびっくりした」
「友好的？」
「そそ」
意外だったのは二課の人達の態度だった。
世間じゃ正義の味方だと持て囃されてはいるものの、私はこの16ヶ月で結構な悪事を働いたのだから。
ノイズの操り手に繋がる手掛かりを求めて東へ、西へ。必要とあれば盗みもしたし、脅しもした。
その折に知り得た情報にイラッとして、そのまま風鳴宗家……翼さんの実家に乗り込んでお話したこともある。

ノイズ狩りの時にだって、私が殺したのと変わらないような犠牲が出ているのだ。
一言で言えば、大犯罪者。
それを口実とするでもなく、不問とするとはなんという待遇か。
「きっと仲良くなれる、二課のデータベースも覗けるかも。……初めての前進だよ」
「見つかるといいね、手掛かり」
「うん」
当然ながら、今になって二課の内部に入り込もうと思ったのには訳がある。
先日、二課と深い関わりを持つ政府要人のひとり、広木威椎（ひろきたけつぐ）防衛大臣が殺害されるという事件が起こったのだ。
十中八九、ノイズを操っている存在の手引きだろう。そうでなくとも無関係という事はない筈だ。
ここ1年の間に繰り返されていた意図の掴めないノイズの発生と違い、今回の事件には明確な目的があったに違いない。
ならば、この一件から連鎖するように、二課を取り巻く環境は少なからず変化するだろう。
その変化を二課のデータベースと照らし合わせれば、あるいは『フィーネ』に手が届くかもしれない。
――――ノイズの操り手、フィーネ。
人名としてはドイツ系の女性名だけど、略称じゃないとすればあまりに珍しい名前でもある。
音楽記号からとった暗号名（コードネーム）と考えた方がしっくりくる。であれば、女性と決め付けてかかるのも危険だろうか。
「前進はあったけど、先は長いなぁ……」
二課との合流を来月としたのは、内通者が『証拠隠滅』を図る際にボロを出すのを期待しての事。
証拠隠滅により発生する証拠をこそ私は求めている。
だけどもうひとつ。
もう少しだけ粘ってみたかったからという思いもあった。

未だ展開出来ない、固有結界『無限の剣製』。
魔力は足りるし、魔術回路にだってもう十分な強度がある。
それなの

〝I(体)am(は) the(剣) bone(で) of(出) my(来) sword(て).(い)(る)〟

――そこから続く九小節。
当たり前のようにあるはずの、繋げるものがどこにもない。
あとひと月で、なんとかモノに出来るだろうか。

……話題が尽きて、会話が終わる。
にらめっこでもするかのように未来の顔を眺めながら、そろそろ食器を片付けようかと考え始めた頃。
私の携帯端末に電話の着信がかかった。
「……あれ、間違い電話かな」
画面に表示されているのは見覚えのない番号。首を傾げると、未来も真似して首を傾げた。
なんて可愛いんだろう。
上機嫌で電話を取る。
「もしも――――」
『夜分遅くに申し訳ないッ！』
上機嫌は吹き飛んだ。
未来にまで届くほどの音量、低音で轟くシブい声。
やけに気合の入った声に肩をすくめ、思わず眉間にシワを寄せた。
『失礼……俺は二課の総司令官、風鳴源十郎だ』

―4―

「ふう――――」

二課本部のシャワールームでひとり、身体中に絡みついた疲労を流す。
熱いシャワーは立花に付けられた切り傷達にひどく沁みるが、それは同時に不思議な心地よさを感じさせるものでもあった。
色々あって、時刻は午前８時。
臨戦態勢で待機し続ける事５時間余り、結局は徹夜になってしまった。
……あの後、立花にさせられた短い気絶から叩き起こされてから。
私は緒川さんが立花の二課訪問を取り付けてくれた事と、同時に発生していた異常事態について聞かされた。
立花の件については一安心だ。
緒川さんが交わした約束があれば、二課という組織は立花に喧嘩を売らずに済むだろう。
問題だったのは異常事態とやらの方。
起動済みの状態で発見され、極秘かつ慎重に検証を続けられてきた完全聖遺物『ギャラルホルン』。
私の立場ですら存在を教えられていなかったその聖遺物が、突如としてアラートのようなものを発し始め……朽ちて、塵となって、失われたのだ。
そして、その異変に前後して二課のレーダーが捉えた謎の反応。
この、関連するかもしれないふたつの出来事に、二課は一晩中振り回される事になってしまった。
もう、すっかり朝になってしまったが、漸（ようや）く立花との一戦を反省する時間を得た。
「敗北……」
交わした剣戟を思い出す。
あまりに複雑で、濃ゆい時間だったあの立ち会いを思い出す。
自分が振るった剣筋、振るうべきだった剣筋を脳裏でなぞり、考察する。
あれだけ基礎能力に差があってなお、立花の掌の上から脱する事なく敗れたのだ。

今は無数の反省が胸の中で渦巻いている。そして、もう一度立ち会えばきっと自分が勝利するという、言い訳でしかない自信がある。
とても苦く、また、糧となる経験だった。
あるいは『本気の勝負』なら、初戦で勝てていただろうか。
しかし自らの切り札を伏せたまま立ち会っていたのは、きっと立花も同じ事。互いが互いの身を案じながら、あの剣戟には友愛すら感じられた。
「戦う、理由か……」
立花は、それを問う為だけにあの場に残った。
剣を交えてでも二課への連行を拒絶する程の何か、理由があった筈なのに。ただひとつの問いを投げ掛ける為だけに、あの場所に残ったのだ。
時間を経て落ち着くと、その事に思い当たった。
……私の答えは、考えるまでもなく決まっていた。
宿命だから。風鳴に生まれたからだ。
故に、自らをひと振りの剣として鍛えたのだ。
立花はそれを聞いて、意外にも怒ってみせた。
悲しむように、ぎこちない皮肉に叱る言葉を隠してぶつけてきた。
――体は剣で出来ている。
そんな独り言を唱え、それを体現してきた立花の反応とは思えなかった。
『人に非ず』という言葉には、どんな意図があったのか。『剣に非ず』と私を罵った立花には、私の未熟が見えていたのか。
彼女の目に映る私は『何者にもなれない風鳴翼』に過ぎなかったのか。
時間が経てば経つほどに、立花響という剣士に聞きたい事が増えていく。

あの問いに、
立花はどんな答えを期待していたのだろう。

EPISODE11　ふたりぶんの憎悪

―1―

学生寮への引っ越し当日、少し肌寒い春の朝。
軽い朝食を済ませた私達は、配送に出していない小さな手荷物を纏めて、少し遅めに小日向家を出立した。
電車を乗り継いで、降りた駅前のカフェで昼食をとり、さらに歩く事しばらく。
リディアンの校舎からほど近い、高級マンションみたいな立派な学生寮の……それにしては少しせまい二人部屋にたどり着く。
昨日まで未来の部屋に居候していた私だけど、ここでも私達はルームメイトになれた。それもふたりきりの住まいだなんて、なんだか新婚さんみたいでドキドキする。
きっと未来も同じことを考えていたのだろう。
思わず顔を見合わせて、お互い、照れくさそうに微笑んだ。
「よしッ！　荷解きしちゃおっか」
「そうね、結構多いもの」
部屋の中には、見るだけでも面倒に思えてくる量のダンボールが置いてある。これを今日中に全部とはいかないだろうけど、ある程度は片付けてしまおう。
ヘンな　もとい、凝ったデザインの棚には小説や漫画、雑誌や小物なんかを収めて、地味で無骨な本棚には教科書を並べる。
横目で見る未来も、衣類のダンボールから中身をタンスへと移し始めていた。
私の下着から真っ先に手を付けていたのは見なかったことにしよう。
少しづつ解けていくダンボール箱、徐々に充実していく収納棚。だけど、そこに風鳴翼という歌手が関連する品はひとつも無い。
……あれらは、未来が全て捨ててしまった。
私の自業自得とはいえ、私に大怪我をさせた翼さんが疎ましかった

のだろう。
「――――」
未来に備わる『思い出す能力』は、私の魔力から私の記憶を読み取ることが出来た。
私が感じた、痛み。苦しみ。
辛いという、心の底で転がした弱音。
それら全て、私にとっては優先順位の低い……時間と共に溶けて消えゆくものだとしても。
未来にとっては、色褪せることない悪夢の積み重ねに他ならないものだったのだ。
「あのさ――――未来っ」
「ん、どうしたの？」
ずっと、気が付かなかったんだ。
私の生き方が、どれだけ未来を苦しめてきたのか。
「その……いつも心配かけて、ごめん」
「え？　……うん、」
未来は、私が戦う事に納得してくれている。
だけどそれは、傷つく事を容認するものでは決してないのだという事を、私は理解できていなかった。
「無事で居てね、信じてるから」

―2―

そして翌日、入学式の後。
チュートリアルみたいな軽い授業を終え、まだ慣れない新居に帰還した私達は制服のまま、残るダンボールを片付けにかかった。
衣類が入りきらないだとか、二段ベッドの使わない下段をどう使うか……なんて。新生活へのワクワクを話し合いながら数十分。
陽が傾き始めた頃に、備え付けのインターホンが来客を告げた。
「はぁい、今出ま～す」
上機嫌のまま、小走りで出迎えに行く。

誰が来たのかは分かっている。さっき、翼さんが学生寮に足を踏み入れる姿を窓から見ていたのだ。
「どなたさまー、と……こんにちは、翼さん」
「ああ……久しいな。今から来られるか」
「はいっ、ちょっと待ってください」
返す言葉を濁して、作業を中断した未来が近付いて来るのを待つ。ちょっとした忘れ物があるのと、持って行ってはいけないものを預ける為だ。
「響？」
「二課に顔出してくるね」
流れるように未来と軽く唇を重ねて『行ってきますのチュウ』をする。背後で顔を背ける気配。
即座に首から下げていたガングニールの糸をつまんで断ち、下に差し出された未来の手に、シャツの中を通してそっと落とした。
「いってきます！」
「いってらっしゃい」
寮を出て学園へ。
翼さんの後について、二課本部に通じる中央棟へと歩みを進める。
『孤高の歌姫と並んで歩くアイツは誰だ』みたいな視線がなんだかむず痒い。
気を使おうと言葉を探していると、そんな私に気付いたのか翼さんが呆れるように先手を打った。
「愛想は無用だ、立花。これから行く所に……そんなものは必要ない」
「――――、」
……それは確かに、尤もだ。
二課本部までの短い道中、談笑しながら歩けばその雰囲気を持ち込みかねないだろう。
これから私は人の命を守る戦いに向けて、共に手を取り合う為の重要な対話に挑むのだ。
そんな人類守護の拠点に浮ついた雰囲気のまま踏み込んでいい筈がない。

今一度、気を引き締める必要がある。
「しかし、意外だな」
「へ、意外？」
「立花はもっと――――苛烈な戦士というイメージだった」
「あ、あァ……アハハ」
そして、落ちるような速さのエレベーターに乗り、いよいよ地下深くにある二課本部に足を踏み入れた。
どうもこの施設は改修工事の真っ最中のようで、その作業に従事する職員さん達が所々に散見できた。
「ここって、どんな人が設計してるんですか？」
「ここは――――この場所の殆どは櫻井（さくらい）女史の設計によるものだ。異端技術を研究する専門家の筆頭、シンフォギアも彼女の理論に基づいて作成されている」
「……凄い人なんですね」
「ああ、凄い人だ……着いたぞ、立花。ここに連れてくるようにと言われていた」
そして、たどり着いた部屋の前。
脳裏で撃鉄を落とし、魔術回路を励起させつつ静かに呼吸を整える。
緊張と警戒を胸に巡らせ、自動ドアの前に姿を晒した私
「ようこそッ！　特異災害対策起動部二課へ！」
――――弾けるクラッカーの快音、安いラッパの気の抜ける音が。
『熱烈歓迎！　立花響さま』なんていう横断幕の下。まるで学生の行うバースデーパーティーのような、アットホームな雰囲気に包まれたパーティー会場が出迎えた。
「……。」
斜め上に突き抜ける予想外。
気付けば私は翼さんとふたり、揃って眉間を抑えて斜め下に俯いていた。

どうやら……私は、二課という組織を侮っていたらしい。
私のような怪しい存在を、これほどの高待遇でアッサリと引き入れたのならば、それなりの備えがあって当然だったのだ。
その答えがこの……この、布陣なのだろう。
多くの職員達が飲み物片手にニッコリ笑顔。手の込んだ挑発で感情を揺さぶり、判断力を鈍らせ、洞察力を殺
地味に合理的――――でも、浅薄だ！
これで私は、二課との関係が半ば敵対に近いことを思い出した。
どこかに紛れ込んでいるフィーネの手勢のこともある、緊張感を失ってはいけない。
「お近付きの印にツーショット写真～ッ！」
そう言いながら近づいて来たのは、私服に白衣の目立つ女性。
彼女は素早く私の横に来ると顔を近付け、どう見ても私用の携帯端末の内カメラを起動する。
「ハイ、笑ってーッ！」
「に、にへ～？」
記念撮影から始まった、親睦を深めるかのよう　というより、本気で私と仲良くなろうとしてくれる、二課職員達の絶え間ない……攻勢？
嬉しさに緩みそうな意識を研ぎ澄まし、職員達、ひとりひとりの挙動に意識を配って。
「よしッ、まずは自己紹介だな！」
そんなやり取りが途切れた時。
二課の総司令官、風鳴弦十郎がその場を仕切り直した。
――――風鳴弦十郎。
背が高く、肩幅が広く、筋肉質。
厳のような、獅子のような迫力がある男の人。
先月に電話越しの声を聞いたけれど、顔を合わせるのは初めてになる。
「俺は風鳴弦十郎、ここの責任者をしている！」
「そしてワタシは出来る女と評判の櫻井了子（さくらいりょうこ）ッ。これからヨロシク

ね」
　そして、弦十郎さんに続くように名乗ったのが、さっきのツーショット写真の人。
　シンフォギアの元となる『櫻井理論』の提唱者であり、神秘に関する技　異端技術を専門とする研究者のひとり。
　翼さんが言うには二課本部の設計者でもある。
「えっと、立花響です。その……ノイズ狩りとかやってますッ！」
「うむッ！　お互い色々と気になる事もあるだろうが、まずは情報の共有だな。君は自分の異能力について、どれくらい把握している？」
「必要になったら出てくるものとしか……。この力って、なんなんですか？」
　半ば予想していた質問に返す、予め用意していた台詞。
　嘘をつくのは心苦しいけれど、ここでの発言は全てフィーネに伝わるものかもしれない。慎重に言葉を選ぶ必要があった。
「ああ、では順序立てて解説しよう」
　表情の揺らぎからして弦十郎さんはこの演技を見抜いているようだけど、彼はあえてなのか問い正すこともなく話を進めた。
「我々が扱う異端技術は〝聖遺物〟の力だ。遥か古代に製造された、現代では再現のできない神秘の品を『特定振幅の波動』によって再起動する」
「つまりは〝歌〟の力ね。といっても、完全状態の聖遺物であれば、一度起動するだけで誰でも使えるようになるのだけ　」
　代わる代わるに解説を続ける弦十郎さんと了子さん。
　なんでも、形を保ったまま発見される聖遺物は非常に希少であり、大抵の聖遺物はひどく劣化した状態で発掘されるのだとか。
　シンフォギアシステムも、小さな欠片に僅かに残された力を歌唱し続ける事で引き出し、増幅、プロテクターの形に固着させるものらしい。
　そして、歌により聖遺物を起動できる数少ない〝適合者〟が翼さんであり、立花響はその亜種……とのこと。
　実際は、私の能力はシンフォギアとは無関係だし、適合者でも何で

もない。
『心臓付近に残ったシンフォギア（ガ ン グ）の破片（ニ ー ル）と融合し、超常の力を獲得した融合症例』というのは、彼らの勘違いだ。
そもそも、ほんのひと欠片しかないシンフォギアが、どうやって力を発揮するのか。
そう尋ねると、了子さんはどこか自信無さげに教えてくれた。
「私達は先祖返りのようなものだと考えているわ。神秘に満ちた伝説の時代、響ちゃんのご先祖様が持っていた力が形を変えたものね」
「形を、変えたもの？」
「ええ、失った機能を復元しようとしたガングニールがその力に目をつけた結果……シンフォギアみたいな身体能力の強化や、武装を生成したりする能力として発現したってトコかしら」
説得力があるような、無いような。
やはり説明のつくはずのないモノに対する強引な解釈は、なんだかいまいちスッキリしない。
聞いてみると、二課としてもこの結論には疑問があるようだった。
ただ、この認識の差異から、少しづつ二課の神秘に対する認識が見えてきた。

―3―

学生寮の入り口で、翼さんと先月の衝突を……ちょっぴりぎこちなく謝りあって別れた後。
1階のエントランスホールから吹き抜けを見上げ、誰の視線もない事を確認しながら、防犯カメラの死角を視線でなぞる。
――――部屋で待つ、未来が恋しい。
そんな気持ちを抑えきれずに私は、与えられた部屋のある階層までを一直線に駆け上って帰宅した。
「未来～、ただいまぁ」
まだ慣れない、新しい部屋。
緊張の糸を緩めながら、居間の低い机の前、雑誌を眺める未来の横

に腰を下ろす。
「おかえり、どうだった？」
「ん～、メディカルチェックだって。すきゃんとか撮ったよ」
あの後は、提案されたメディカルチェックを受け入れ、X線撮影なんかをしたのち帰路に着いた。
ひとつ譲歩をしておけば、私からのお願いも通りやすくなる……なんて下心あっての判断だ。
胸のガングニールが存在しない事が知られるけれど、そこはそれ。融合によって肉体と溶け合い、形を失ったとでも解釈してもらおう。
「なんか、すっごい歓迎ムードでさ」
「へえ」
「未来に会いたくてさっさと帰って来ちゃったけど、まだパーティーやってるかも」
凄まじい精神的な疲労がある。
旧陸軍由来の特務機関があんなにもフレンドリーに接してくるなんて、あまりにも予想外だった。
『アットホームな職場』のお手本として教科書に載せたっていいくらい。
「ふふ――――上手くやっていけそう？」
「うん、希望が湧いてきた」
ただ、これはとても嬉しい誤算だった。
肯定的な反応が嬉しいと言うのもあるけれど、何より二課の人達の方から私を信用しようとしてくれているのが有難い。
いくつか分かった事、確信に変わった事もあるし、重要なヒントとなり得るだろう話も聞く事ができた。
「あぁ……あと、最後に……変な事も聞かれたかな。『黄色いシンフォギア』を知らないかって」
「黄色……って、ガングニール？」
「どうだろ、カマをかけるってやつだったのかも」
いつだったか、資料で盗み見た奏さんのガングニールはオレンジ色って感じだったけど、黄色と言われてみれば確かに黄色の割合も多

かったかもしれない。
質問の意図は不明だけど、これも一応、覚えておこう。
「ふぅん……」
――――ぱたりと雑誌を閉じる音。
話のひと区切りを待っていたのか。
未来は手元の雑誌を置くと、身体ごと私へと向き直る。
「……未来？」
ずい、と前のめりに距離を詰める未来。
大好きな未来の匂いが、少し〝熱〟を感じさせる息遣いが、不意打ち気味にやってきて。
心を溶かすような愛しさに、それまで考えていた事はどこか遠い場所に追いやられてしま
「えいっ」
「わわ――――」
そんな、隙だらけの私に狙いを定め、未来は飛びつくように倒れ込んだ。
抱きとめた未来の身体に気を配りながら、ゆっくりと畳に押し倒される。
さっきから、なんだか機嫌が悪そうだと思っていたけ　それは、どうやら杞憂。勘違いだったみたいだ。
「ひびき！」
「はい、な～に？」
「おかえりなさいっ」
慣れない新居にひとりぼっちで待つ時間が、寂しかったんだろう。
私に体重を預ける未来の表情（かお）は、とても嬉しそうで、幸せそうなものだった。
「ただいま、未来」
猫のように体を寄せ、甘えてくる未来の暖かな体温。やわらかな感触。
強い幸せの実感に、さっきまであった筈の大きな疲労はあっという

間に見つからなくなってしまう。
このまま目を閉じて、眠ってしまえたらどれだけ幸福だろうと考えずにはいられない。
「今晩、何たべたい？」
だけどそれは叶わぬ願いだ。
私には、未来に美味しい晩ご飯を作るという使命があるのだから。
新生活が始まったのだ。未来の希望に沿いながらも、食べやすくて、それでいて力のつくものを作りたい。
なんでも来い、と未来の答えを待つけれど、
「何があるの？」
「……、何もないんだった」
引っ越したばかりの新居。
当然ながら、冷蔵庫の中身はカラッポだった。
献立はお買い物の道すがら、ふたりで一緒に考えようか。

―4―

櫻井了子としての自身に与えられた小さな城。
フィーネは二課本部の研究室の小さなモニターで、監視カメラ越しに撮影された今日の立花響の姿を睨む。
この本部の巨大エレベーターシャフト、その壁画に対して感嘆をみせる様子など。所々で子供っぽい挙動を見せてはいるものの、どこか成熟した落ち着きがあるようにも見える……歪な、少女。
「先祖返りの異能か……」
彼女の血に眠る力が、シンフォギアの特性と混ざり合って目覚めた異能力……というのが、櫻井了子としての見解だ。
――――超先史時代の巫女である『フィーネ』としては、苦痛すら感じる程の詭弁だった。
触媒が無い、歌が無い。
等価交換を成立させる、代償が無い。
立花響が生成する武装の一部は、それこそ完全聖遺物にすら匹敵す

る。
そんな、この世に有り得ざるものを容易く生成するなど、まるで〝固有結界〟にも匹敵する現実世界への侵食だ。
……あの異能を見ていると、彼女自身が起動済みの自立型・完全聖遺物なのではという邪推すらしてしまう。
しかし、あの夜に翼が切り落とし、二課へと回収された立花響の体組織の一片は強靭なだけの只の肉片だった。
「4人の融合症例、その中で立花響だけが何故ああも特別なのか……」
遂に行った彼女へのメディカルチェックでは、シンフォギアの欠片が消滅している事、そして左肩を中心に刻印のようなものが広がっている事が確認できた。
あれを更に解析できれば、あるいは彼女の真実に迫れるのかもしれない
「渋るだろうな、あれは」
漸(ようや)く二課との対話を受け入れた立花響ではあるものの、1年以上も関わりを拒み続けていたその警戒心が薄れたわけではなさそうだった。
先月に同行を拒んだ理由すら明かさなかったのだ。精神的な溝はかなり深いだろう。
……加えて、悲願の成就が目前となった今、彼女の抱える〝謎〟は未来への可能性ではなく、破滅への爆弾へと変わりつつある。
彼女が一身に集める民衆の支持があれば月の破壊を完遂したのち、パニックに陥った民衆を纏めるのには役立つかもしれない。
しかし、あれに説得の余地は無いだろう。仮に賛同を得られたとしてそれは、きっと偽りだ。
『生体と聖遺物の融合』という素晴らしいヒントからは、多くの収穫を得ることが出来た。
最早、出涸らしのような存在。
立花響の不確定な〝価値〟は、生かしておくリスクを下回りつつある。
もう十分だと納得し、始末しておくべきだろう。

それに、二課の戦力など為政者から予算を捻出する為だけのもの。
装者がひとり居れば十分だ。
丁度良い事に、私の手元には聖遺物と生体との融合実験における副産物として生み出された便利な戦力が存在する。
補充こそ出来なくなったが、あれはまだ１０個もあるのだ。
あまり惜しんでも持て余してしまう。
風鳴翼まで死なせてしまうかもしれないが、その時は『イチイバルの装者』を使えば事足りよう。